

県道鶴崎大南線道路改良工事関係に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 久保田遺跡

2002

大分県教育委員会



久保田遺跡遠景（東から）



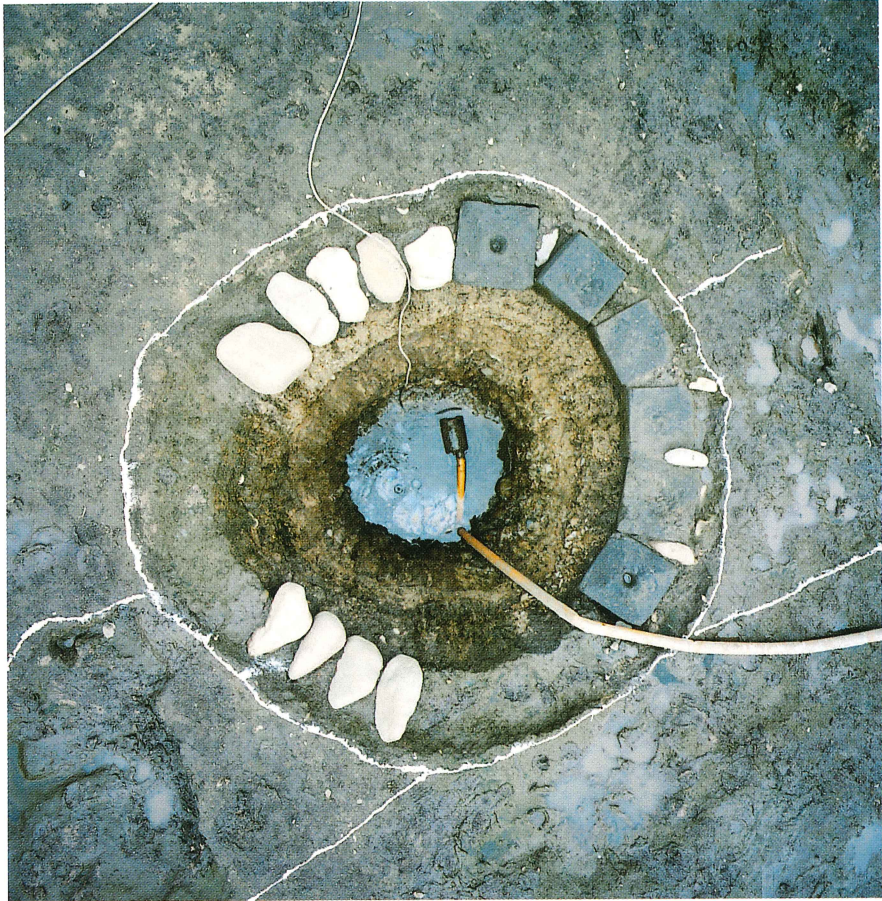


久保田遺跡遠景（南から）



久保田遺跡遠景  
I区空撮





S  
E  
3



S E 3 発掘状況





Ⅱ区空撮



Ⅲ区空撮





Ⅲ区近景



Ⅳ区空撮





SE 3 出土 風炉



SE 3 出土 備前水指



SE 3 出土 火鉢



## 序 文

県道鶴崎大南線の建設は、一般国道10号線の交通渋滞の解消と道路網整備を図るために計画されました。大分市東部と県南地区を結ぶ機関道路の一部として本県の産業・経済発展に役立つとともに、2002年FIFAワールドカップ大会開催時の混雑解消に貢献するものと期待されています。

大分県教育委員会では、この道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を平成12年度に実施致しましたが、久保田遺跡では室町時代を主とする建物跡群を発見、調査しました。この調査成果を公にするため、ここに発掘調査報告書を刊行いたしました。本報告書が郷土史の研究及び埋蔵文化財に対する理解のために役立つよう願ってやみません。

終わりに、調査に御協力いただきました関係各位、地元の方々に対し心から感謝と御礼を申し上げます。

平成14年3月29日

大分県教育委員会

教育長 石川 公一

## 例 言

- 1 本書は大分県大分市大字毛井字久保田所在の久保田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、大分県教育委員会が県道鶴崎大南線道路改良工事に伴って大分県土木建築部企画検査室・大分土木事務所との協議の結果実施した。
- 3 調査にあたり遺構の実測・写真撮影等は調査員が行った。
- 4 図の方位はすべて真北である。
- 5 遺物の洗浄・接合・復元作業は文化課文化財資料室で行った。
- 6 遺物・図面・写真類は文化財資料室に保管している。
- 7 遺物の実測は大部分、遠部慎（文化課発掘調査一般事業担当嘱託）が担当した。
- 8 遺物の写真は友岡信彦（文化課発掘調査資料管理担当主査）・山崎文子（同嘱託）・遠部慎が担当した。
- 9 本書の編集・執筆は高橋信武が担当した。



# 目 次

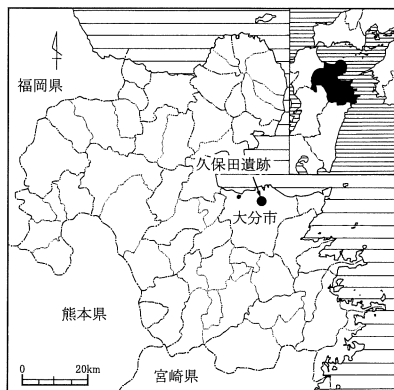
巻頭写真

序文

例言

第Ⅰ章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査体制	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と歴史的環境	1
1	遺跡の立地	1
2	歴史的環境	1
第Ⅲ章	遺跡の概要	4
第Ⅳ章	遺構と遺物	7
第Ⅴ章	まとめ	38

抄録



久保田遺跡位置図



## 第Ⅰ章 はじめに

### 1 調査に至る経緯

大分市東部地区の毛井・松岡地区では2002年FIFAワールドカップサッカー大会会場となる大分スポーツ公園ビッグアイが所在し、予想される交通渋滞の解消対策が急がれている。県道鶴崎大南線の道路工事は2000年から開始され、大分県教育委員会もそれに対応して年度毎に工事予定地内の必要な箇所について試掘・確認調査を実施してきた。昨年度は今回本調査を実施した地区の南北両側の水田として利用されている低地部分の試掘調査を行った結果、沖積層を検出したのみで埋蔵文化財は未確認であった。今年度は地形的に若干高い現集落の広がる丘陵上面が工事対象地であり、現道を東側に拡幅するための用地買収が完了し既存建物類の撤去が終了後に試掘調査を行ったところ、清水川南側地区の微高地で埋蔵文化財を確認した。

試掘調査の結果を受けて大分県教育委員会は県土木建築部企画検査室・大分土木事務所と協議し、若干の準備期間をおいた後、引き続き本調査を行うことになった。

発掘調査は2001年8月22日から同年10月31日まで行った。

### 2 調査体制

久保田遺跡の調査は以下の体制で実施した。

調査主体	大分県教育委員会
調査組織	山本芳直（県文化課長） 伊藤正行（文化課参事兼課長補佐） 清水宗昭（同）
調査担当	高橋信武（同 副主幹） 平野真由美（同 囑託）

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

### 1 遺跡の立地

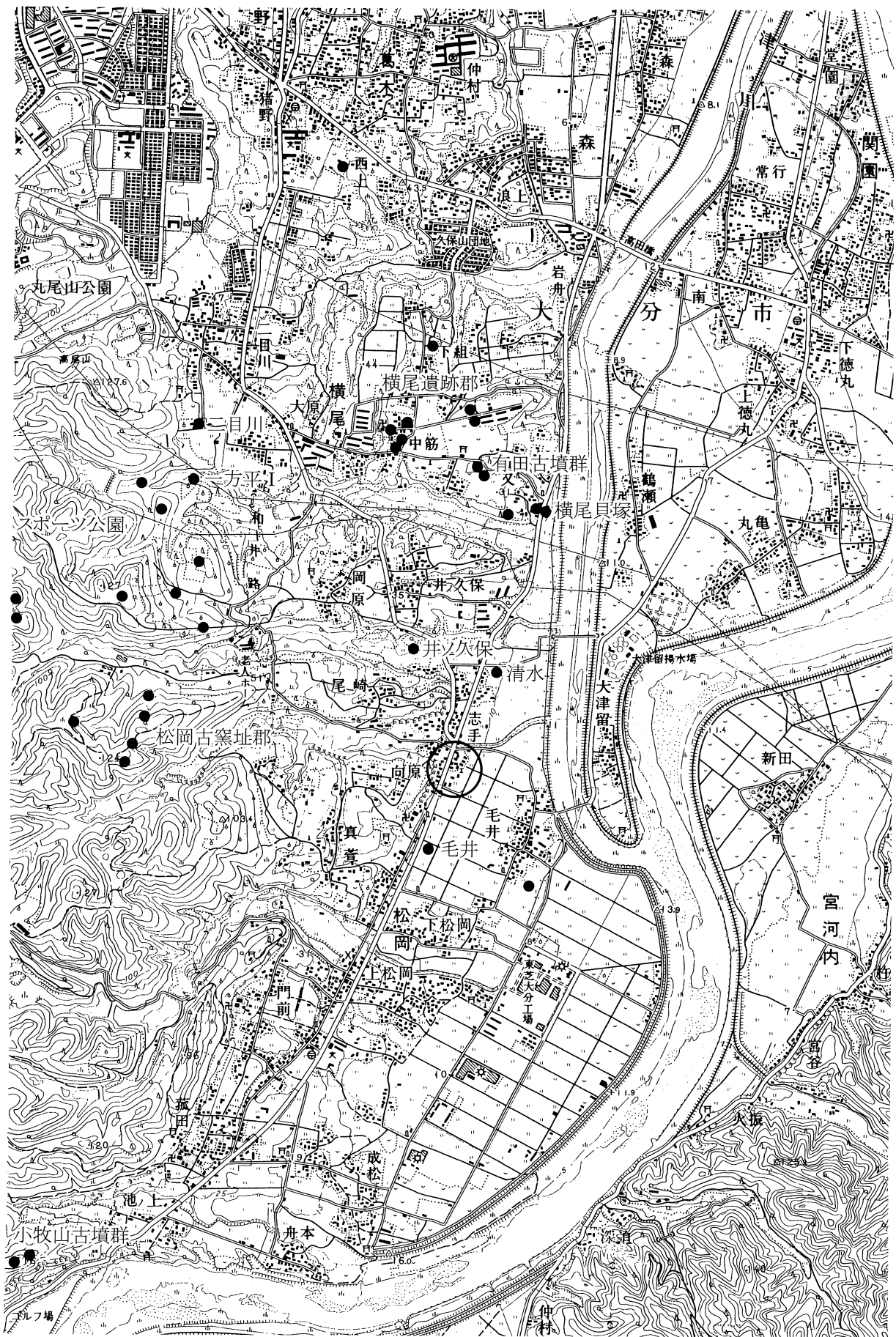
久保田遺跡は大分県大分市大字毛井字久保田にある。九州内陸部の阿蘇山東部から流れてくる大野川が別府湾に注ぐ下流域左岸に位置し、遺跡の標高は遺構検出面で標高10m前後である。大野川下流域の地形の基盤は100数十万年前以降に成立した水性堆積層である。後に自然の作用によってそれが削られ、埋められ、現在見るようないくつもの段丘が残されたものである。段丘最上面は標高120m前後で、平坦面が残っているように見えるが戦後重機による開墾がなされたためのものである。最近まで荒涼とした開拓地といった雰囲気を漂わせた場所であった。久保田遺跡は水田面からは1m～2mの高度差をもつだけの最も低い段丘面に立地する。背後には西へいくに従って高くなる段丘面がつづき、前面には大野川までの間、水田地帯が広がる。調査地点の堆積層は表土下に一部で最大30cm程度の火山灰層がみられるが、その下は軽石質砂層・含礫砂質シルト層・シルト層・円礫を主とする粗粒層などを中心に形成されている。

### 2 歴史的環境

久保田遺跡周辺の歴史的環境について触れておきたい。

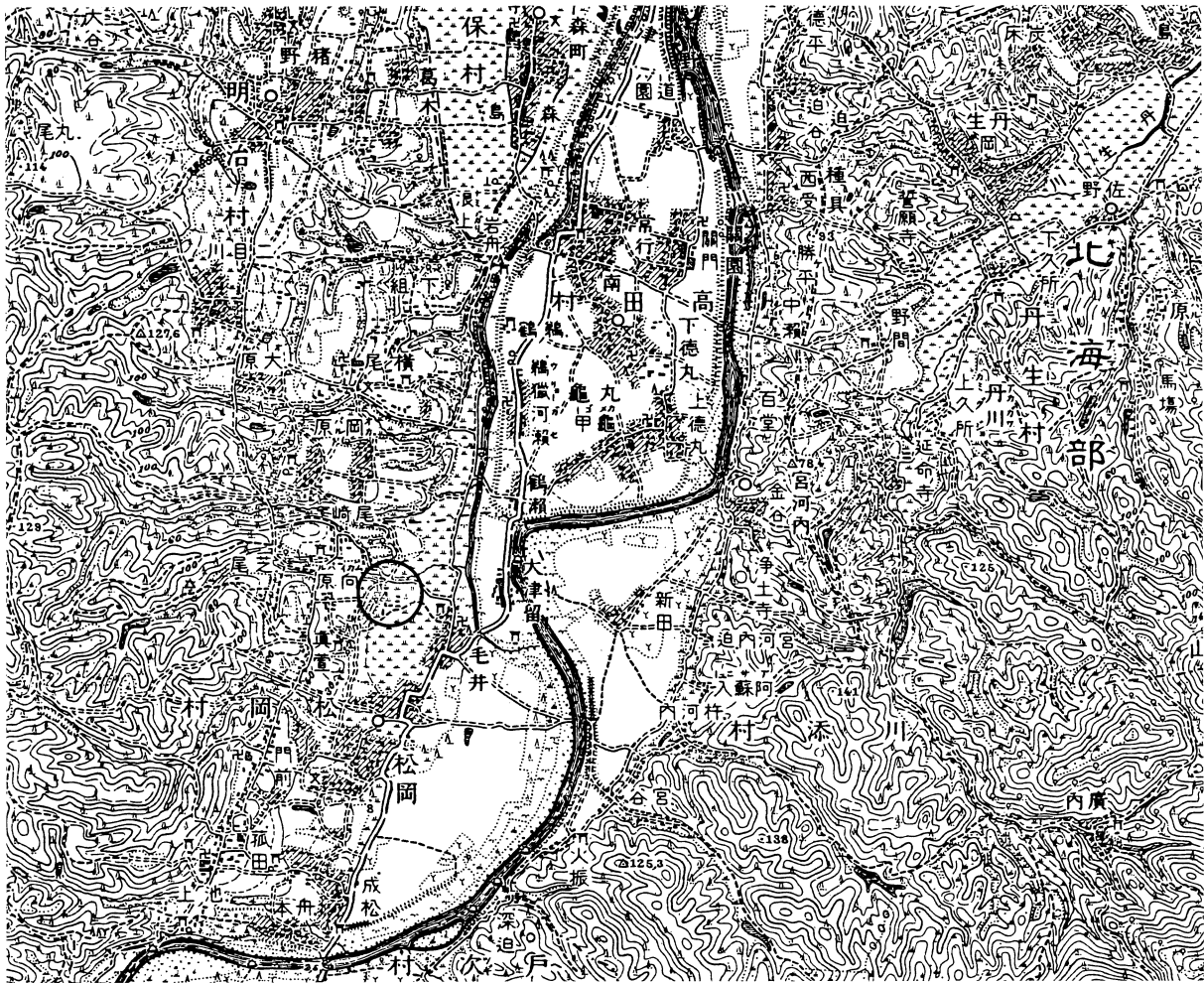
旧石器時代 スポーツ公園建設に伴う発掘調査で標高 0m～50m前後の段丘面が調査された





第1図 久保田遺跡と周辺の遺跡（国土地理院 1/2.5万「鶴崎」）





第2図 明治時代の久保田遺跡周辺 (1901年)

結果、沢山の旧石器時代遺跡の存在が明らかとなった。一方平Ⅰ遺跡・一方平Ⅱ遺跡・一方平Ⅳ遺跡・九池遺跡・牧ノ内遺跡等である。特に一方平Ⅰ遺跡の調査では、石器の材料となる流紋岩は基盤の水成堆積層に含まれる円礫が使われていたらしいことがわかり、流紋岩製石器の石材の供給源について見直されることとなった。

**縄文時代** 草創期の遺跡は見つかっていない。早期は標高5m以下の低地部に横尾遺跡があり、植物製手提げ袋や建築部材らしい木材が出土している。一方平Ⅲ遺跡・同Ⅳ遺跡は丘陵上の遺跡である。九池遺跡では円い平面形の陥し穴の調査例がある。旧石器時代か縄文時代のものであろう。前期・中期・後期は横尾遺跡に貝塚が残された。ここでは晩期の遺物も出土している。一方平Ⅳ遺跡では小川に面した谷底そばの狭い斜面に晩期末から弥生中期の遺跡が調査された。水稻耕作が始まったとされる時期であるにもかかわらず、農耕具は認められない。

**弥生時代** 清水遺跡で竪穴住居跡が検出されたほか、一方平Ⅳ遺跡以外目立ったものがない。

**古墳時代** 古墳時代の竪穴住居跡が低地にある清水遺跡・毛井遺跡で出土し、現在の集落立地と同じになる。小牧山古墳群はこの地域唯一の墳丘をもつもので、地域の首長一族の墓地であろう。

**古代** 久保田遺跡の南方約1kmの松岡の平坦な丘陵面は海部郡の丹生駅想定地だが、未調査である。8世紀中頃に操業した松岡古窯址群は豊後唯一の須恵器を焼いた遺跡で、豊後国府直轄の工房であろう。井ノ久保遺跡・尾崎遺跡からは土師器焼成遺構が発見され、北方の横尾遺跡群では粘土採掘坑が多数検出されている。上牧ノ内Ⅰ遺跡では9世紀の灯明皿が数百個密集出土した。大野川と大分川に挟まれた地域の東部には、この他にも役所的な遺跡が多いという特徴がある。



中世 鎌倉時代の嘉碓 2 (1236) 年、信濃国御家人平林四郎頼守が承久の変の軍功により毛井社地頭職に補任され、以後室町時代を通じて平林氏の領地であった。

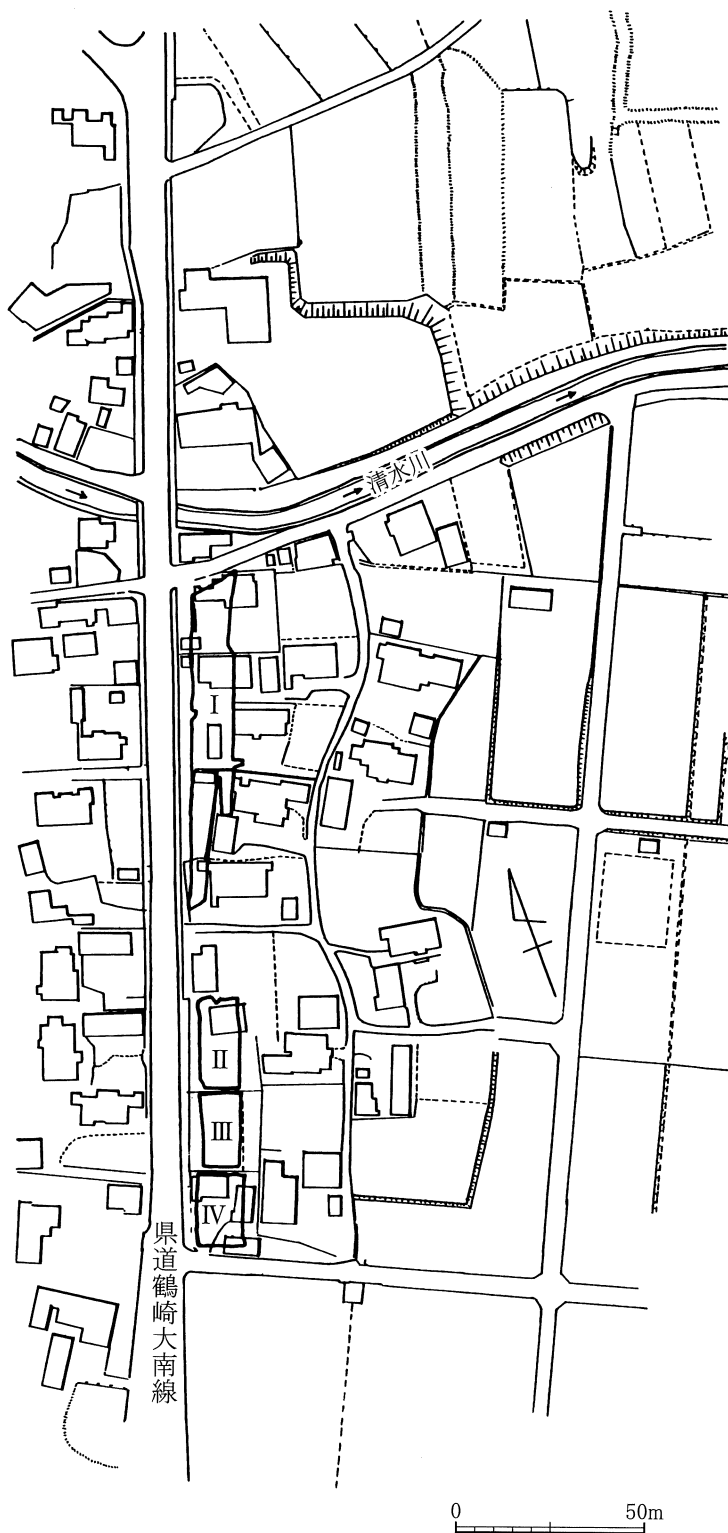
### 第三章 遺跡の概要

調査を始めた時点では全て撤去されていたが、調査区は民家の密集する場所にある。重機により表土を除去したが、人為的な盛り土が平均 1 m 以上、北部では 2 m 近く堆積していた。南部では民家の境界にコンクリート壁が深く構築されていたため、撤去せず調査した。調査区が分断されたため、便宜上 I～IV 区に分けて調査した。試掘調査で I 区と II 区の間は地山が落ち込み、東から青灰色の粘土層が入り込んで堆積しているのを確認していたので、本調査では表土を剥いでいない。

検出した遺構・遺物の時代別の内訳は以下のとおりである。

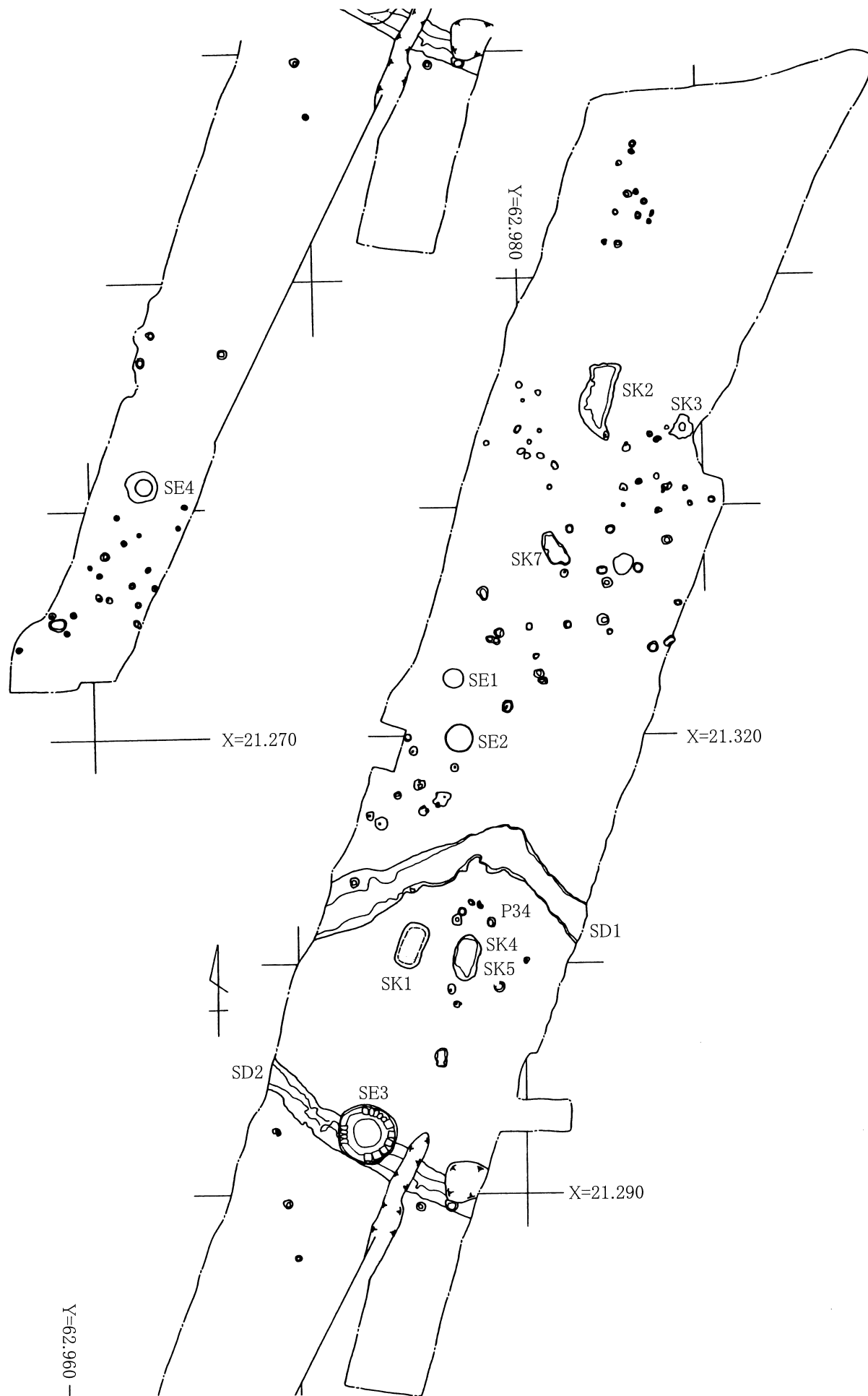
縄文時代	晩期土器片
弥生時代	後期頃の土器片
古墳時代	須恵器片
古代	土坑 1 基・溝 1 条?・土師器
中世	掘立柱建物跡 8 棟・土坑・溝 3 条?・井戸 1 基
近世～現代	土坑・溝・井戸 3 基

井戸を 4 基検出したことでも分かるように、調査中湧水が絶えず、ポンプによる排水が必要であった。2 基は調査前まで使用していた井戸であり、図化しなかった。



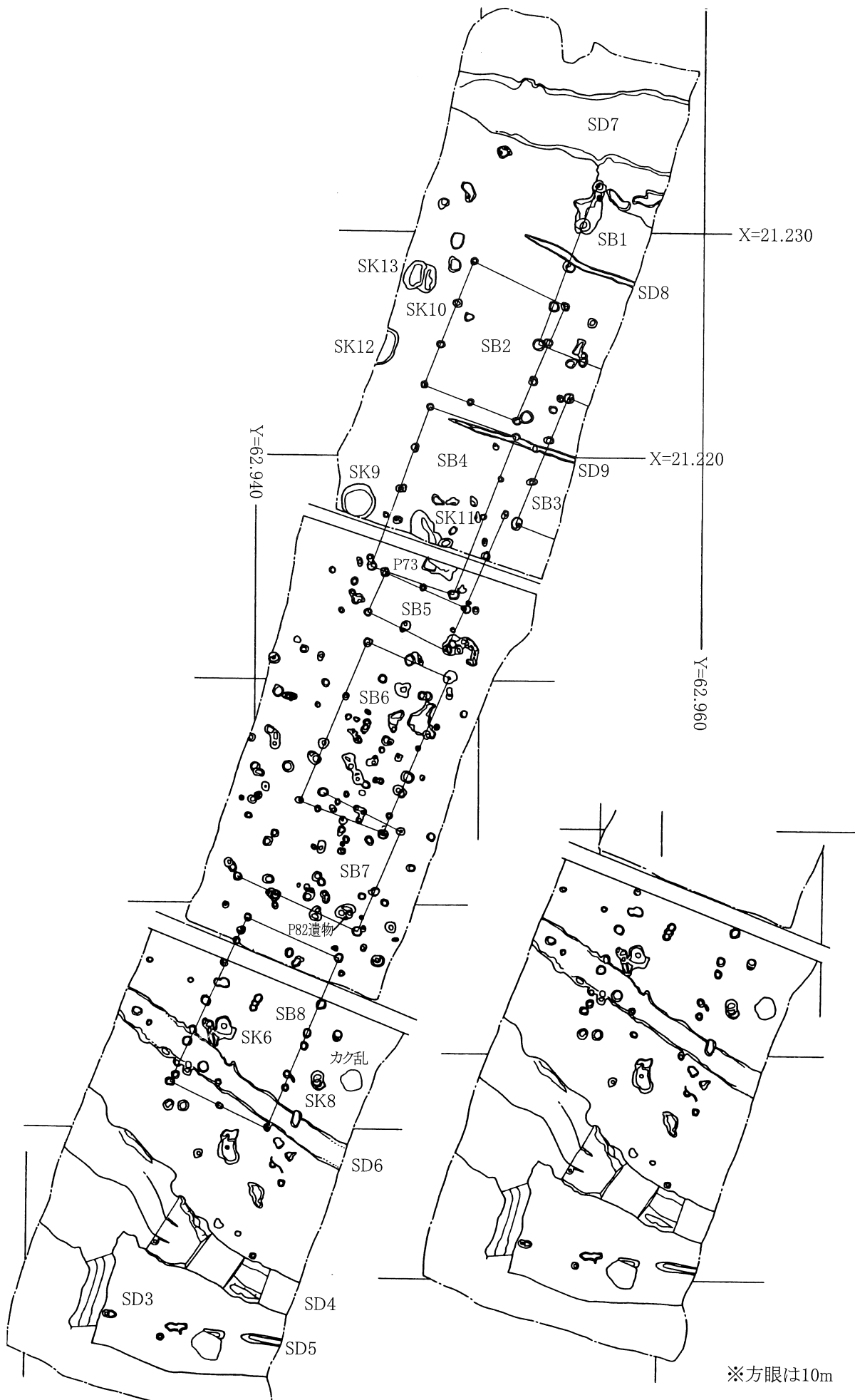
第 3 図 久保田遺跡調査区の位置





第4図 久保田遺跡北部地区（I区）遺構分布図





第5図 久保田遺跡南部地区（Ⅱ～Ⅳ区）遺構分布図



## 第IV章 遺構と遺物

時期のはっきりしない遺構が少なからずあるので、遺構種類毎に述べてゆきたい。

### 掘立柱建物跡

建物跡として報告するのは8棟である。その中には、調査区が狭いため全貌のわからないものや、側辺の一例しか確認できないものも含んでいる。すべてⅡ～Ⅳ区で検出した。Ⅰ区では柱穴類を100個以上検出したが、掘立柱建物跡を一箇所も復元できなかった。庇の付く建物もない。面積では8号掘立柱建物跡が大きく、桁行きの柱間隔では6号掘立柱建物跡が飛び抜けている。

#### 1号掘立柱建物跡（SB1・第6図）

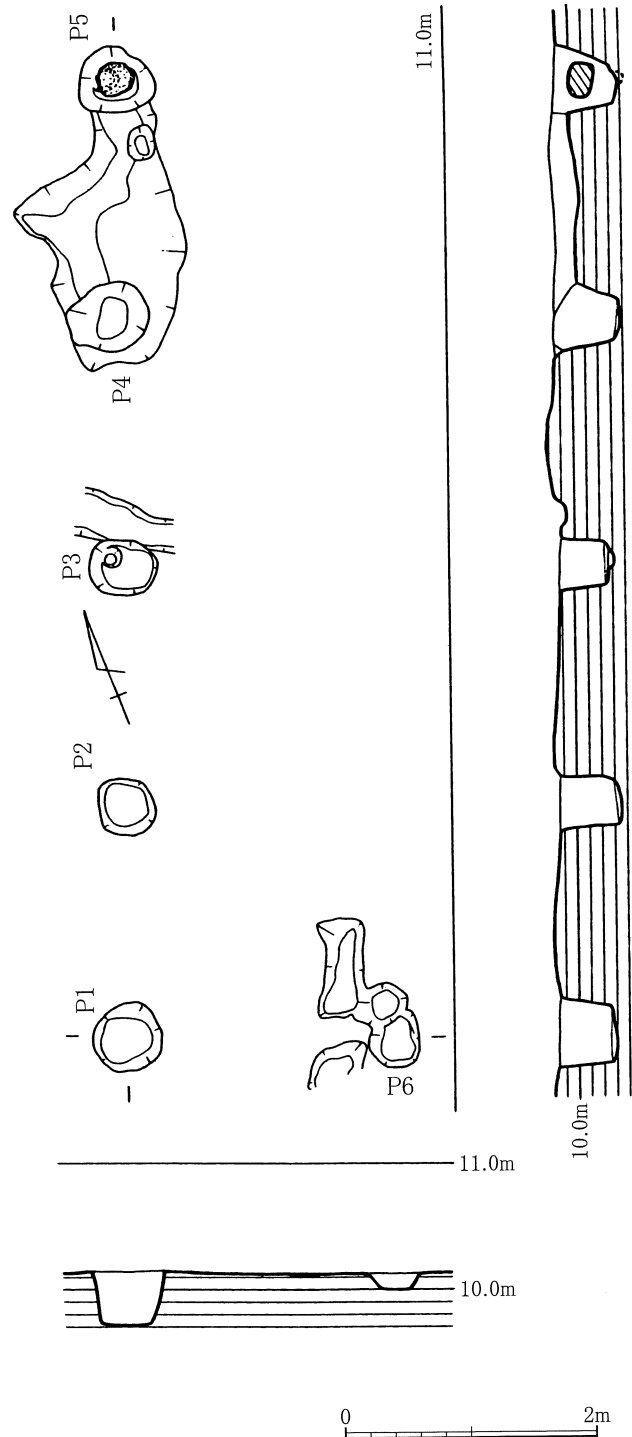
Ⅱ区の東部に位置する5個の柱穴及び直角方向にある1個からなる建物跡推定地である。4間×1間以上の規模をもつ。長軸を南北方向にとる建物であろう。主軸の方位はN-21°-Eである。P6は他のものより浅いので、疑問がある。柱穴の間隔はP1-186cm-P2・P2-189cm-P3・P3-200cm-P4・P4-189cm-P5・P1-215cm-P6となり、P1からP5の平均値は191cmである。

出土遺物はない。

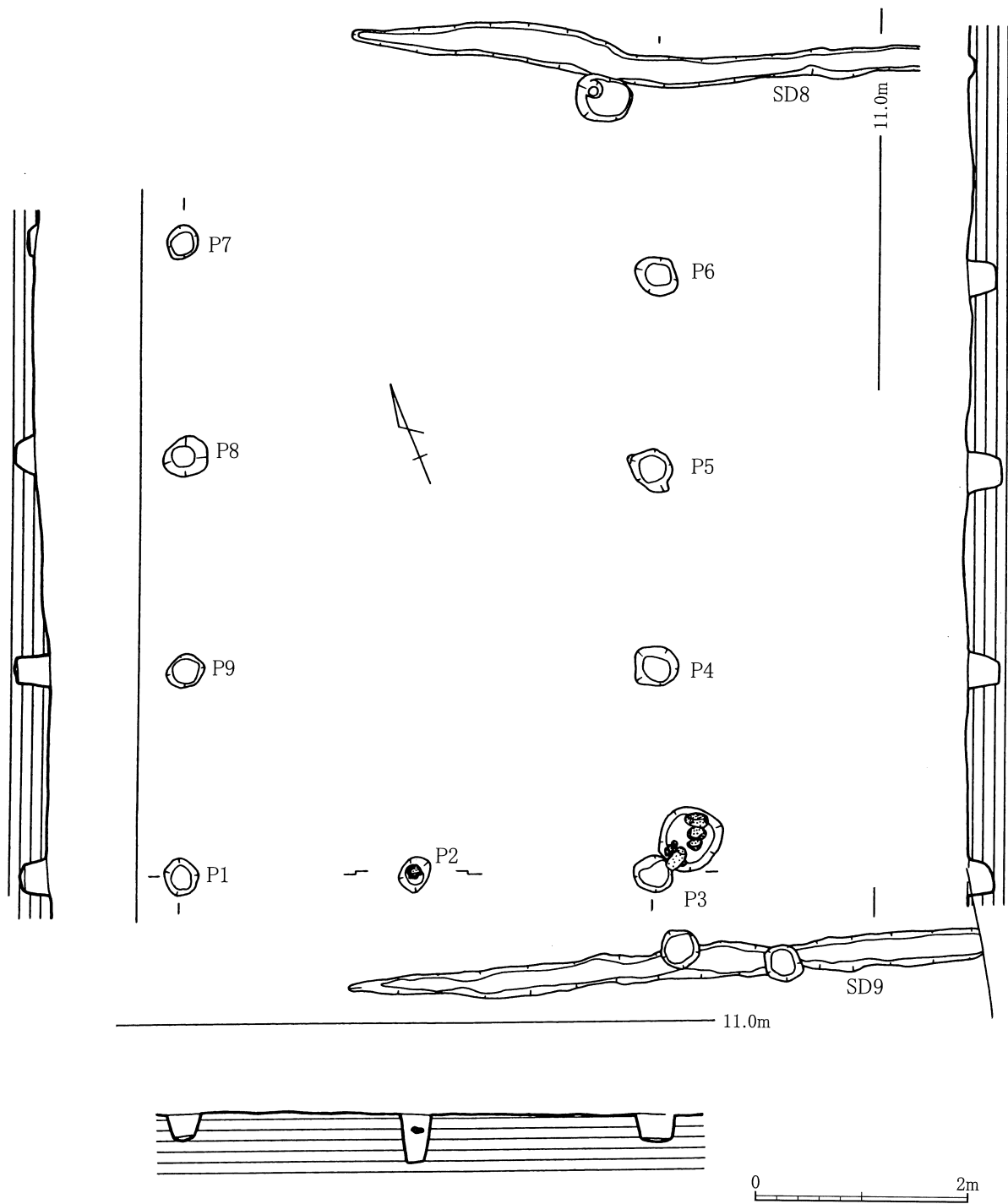
#### 2号掘立柱建物跡（SB2・第7図）

Ⅱ区の中央部のSD8とSD9がつくる空間に位置する。2間×3間の建物跡である。主軸はN-22°-Eを指す。梁行き間はP1-220cm-P2・P2-228cm-P3・P6-451cm-P7で、平均値は225cmである。桁行き間はP3-193cm-P4・P4-186cm-P5・P5-183cm-P6・P7-200cm-P8・P8-200cm-P9・P9-196cm-P1で、平均値は193cmである。

出土遺物はない。



第6図 SB1実測図



第7図 SB2実測図

### 3号掘立柱建物跡 (SB3・第8図)

Ⅱ区南東部に位置する柱穴4個が1列に並ぶ部分のことである。直角方向の柱が見つかってないので性格は明らかではない。主軸の方位はN-22°-Eである。柱の間隔はP1-201cm-P2・P2-203cm-P3・P3-214cm-P4で、平均値は206cmである。

出土遺物はない。



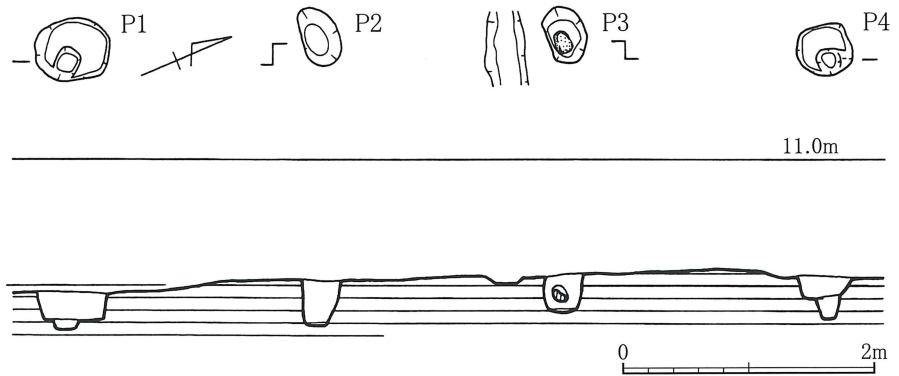
4号掘立柱建物跡 (SB4・第9図)

Ⅱ区南部からⅢ区に位置する1間×4間の建物跡である。主軸はN-22°-Eを指す。梁行き間はP1-383cm-P2・P5-408cm-P6で、平均値は396cm(2間建物とすれば198cmになる)

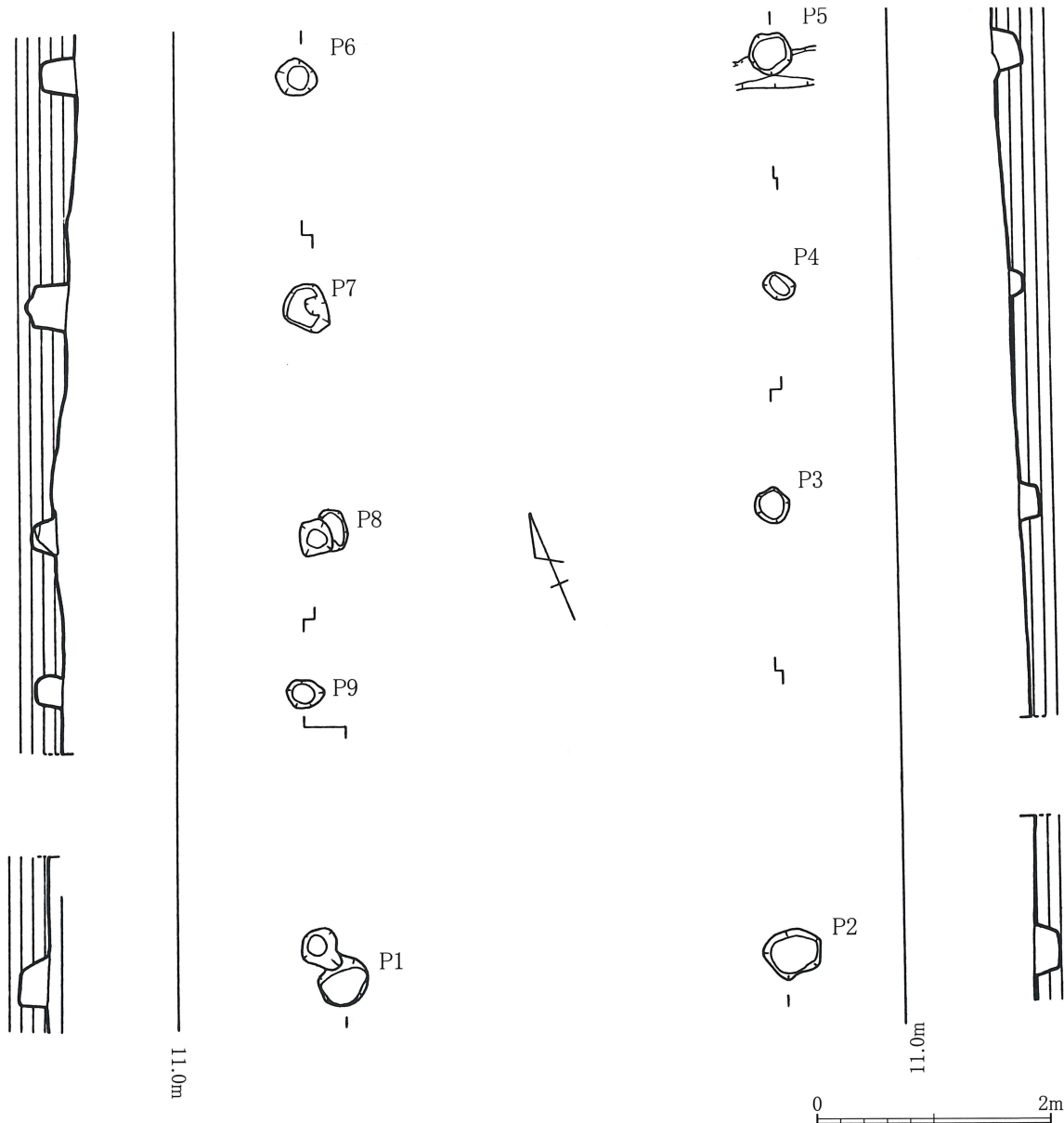
である。桁行き間はP

2-386cm-P3・P3-186cm-P4・P4-199cm-P5・P6-195cm-P7・P7-199cm-P8・P8-133cm-P9・P9-253cm-P1で平均値はすべて4間として193cmとなる。

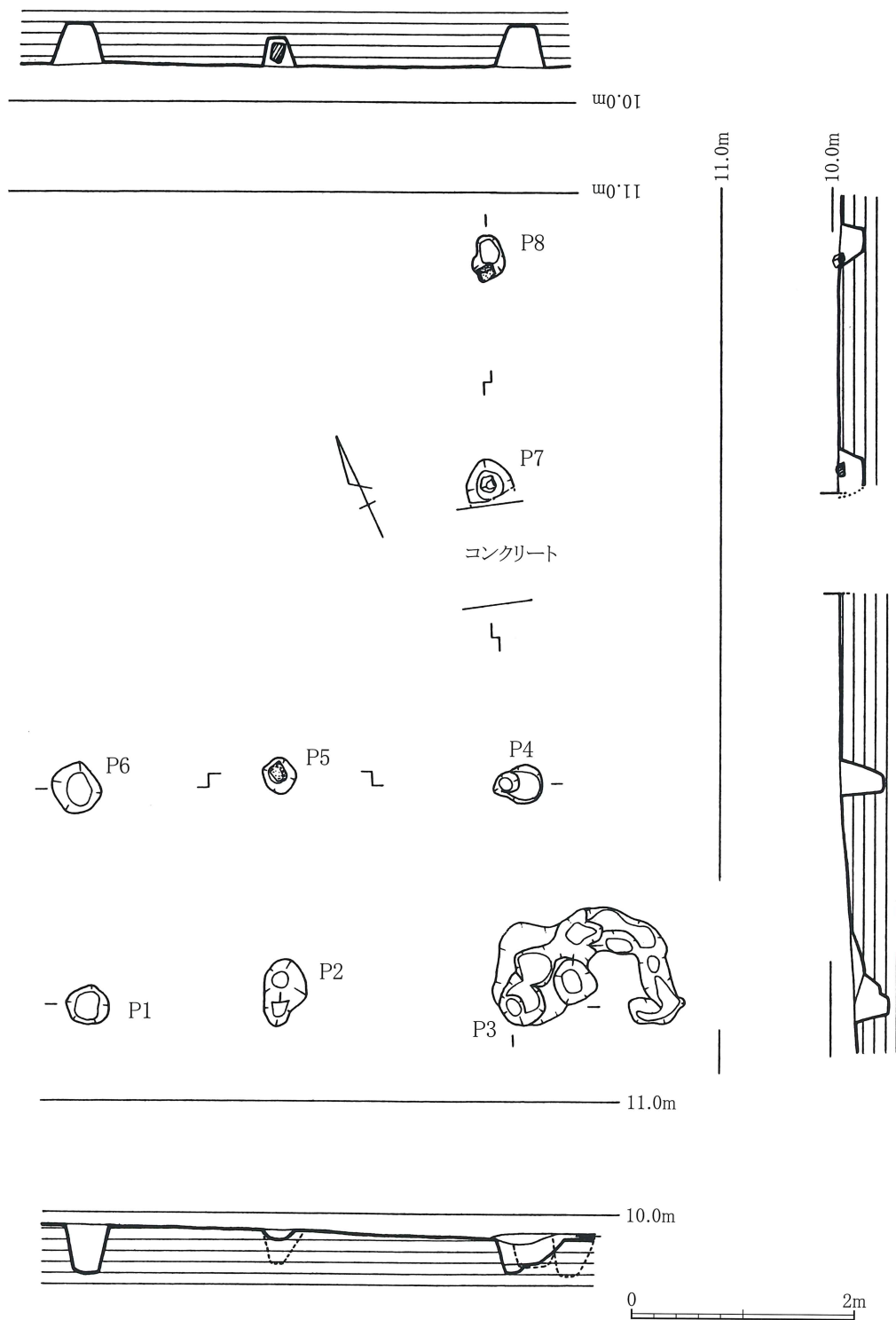
出土遺物はない。



第8図 SB3実測図



第9図 SB4実測図



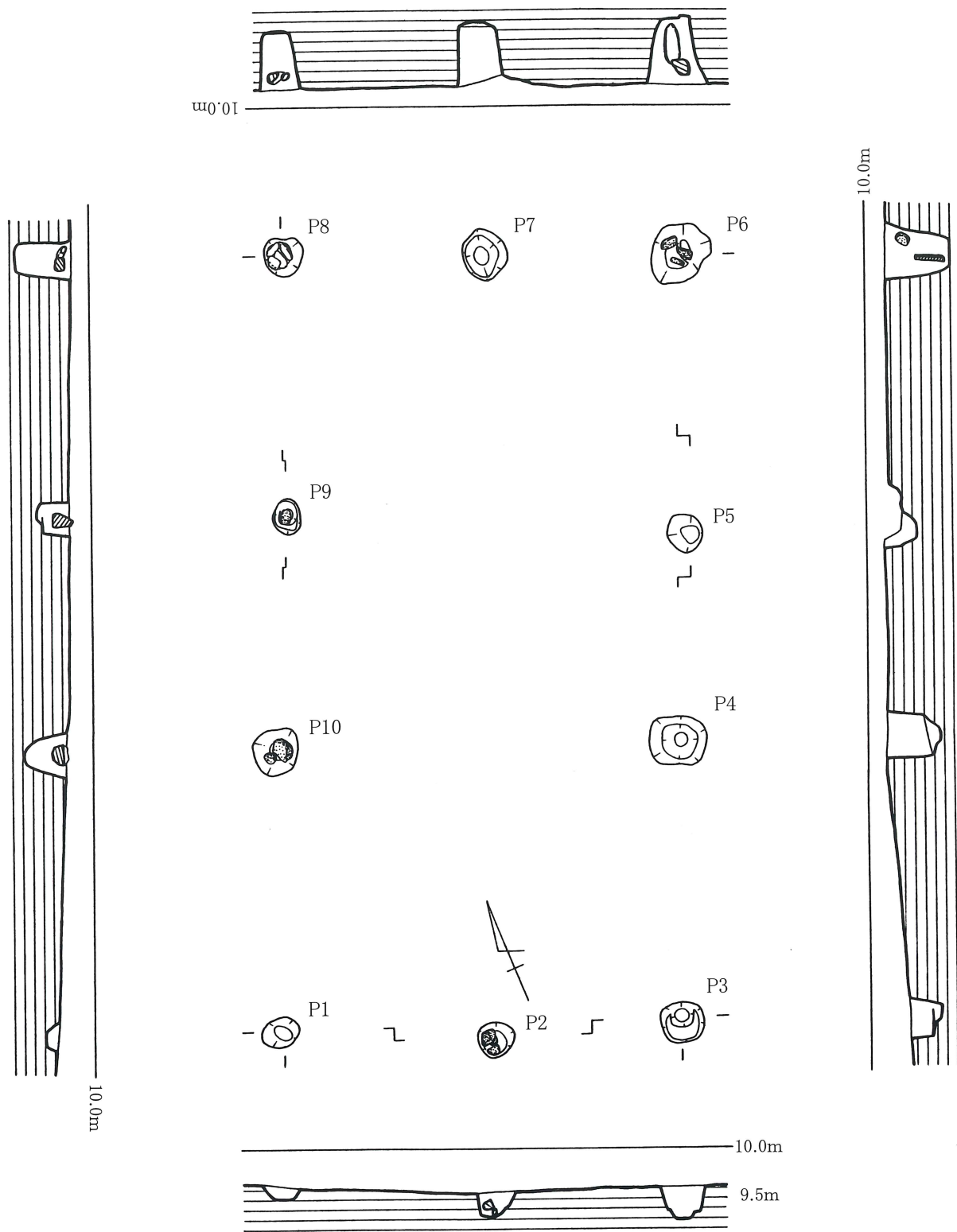
第10図 SB 5 実測図

5号掘立柱建物跡 (SB 5・第10図)

Ⅱ区からⅢ区にかけて検出した1間×2間の建物跡に直線的に並んだ2個の柱穴を組み合わせたものである。建物跡の主軸方位はN-65°-Wを指す。梁行き間は190cm~200cm、桁行き間は平均191cm。梁行き間はP1-193cm-P6・P3-199cm-P4で、平均値は196cmとなる。桁行き間はP1-173cm-P2・P2-211cm-P3・P4-206cm-P5・P5-178cm-P6で、平均値は192cmである。柱列間はP4-267cm-P7・P7-209cm-P8で平均値は238cmである。

出土遺物はない。





第11図 SB 6 実測図

6号掘立柱建物跡 (SB 6・第11図)

Ⅲ区の中央部に位置する2間×3間の建物跡である。主軸はN-23°-Eを指す。梁行き間はP1-213cm-P2・P2-189cm-P3・P6-195cm-P7・P7-203cm-P8で、平均値は200cmである。桁行き間は3-274cm-P4・P4-205cm-P5・P5-277cm-P6・P8-259cm-P9・P9-235cm-P10・P10-281cm-P1で、平均値は255cmである。

出土遺物はない。

7号掘立柱建物跡 (SB7・第12図)

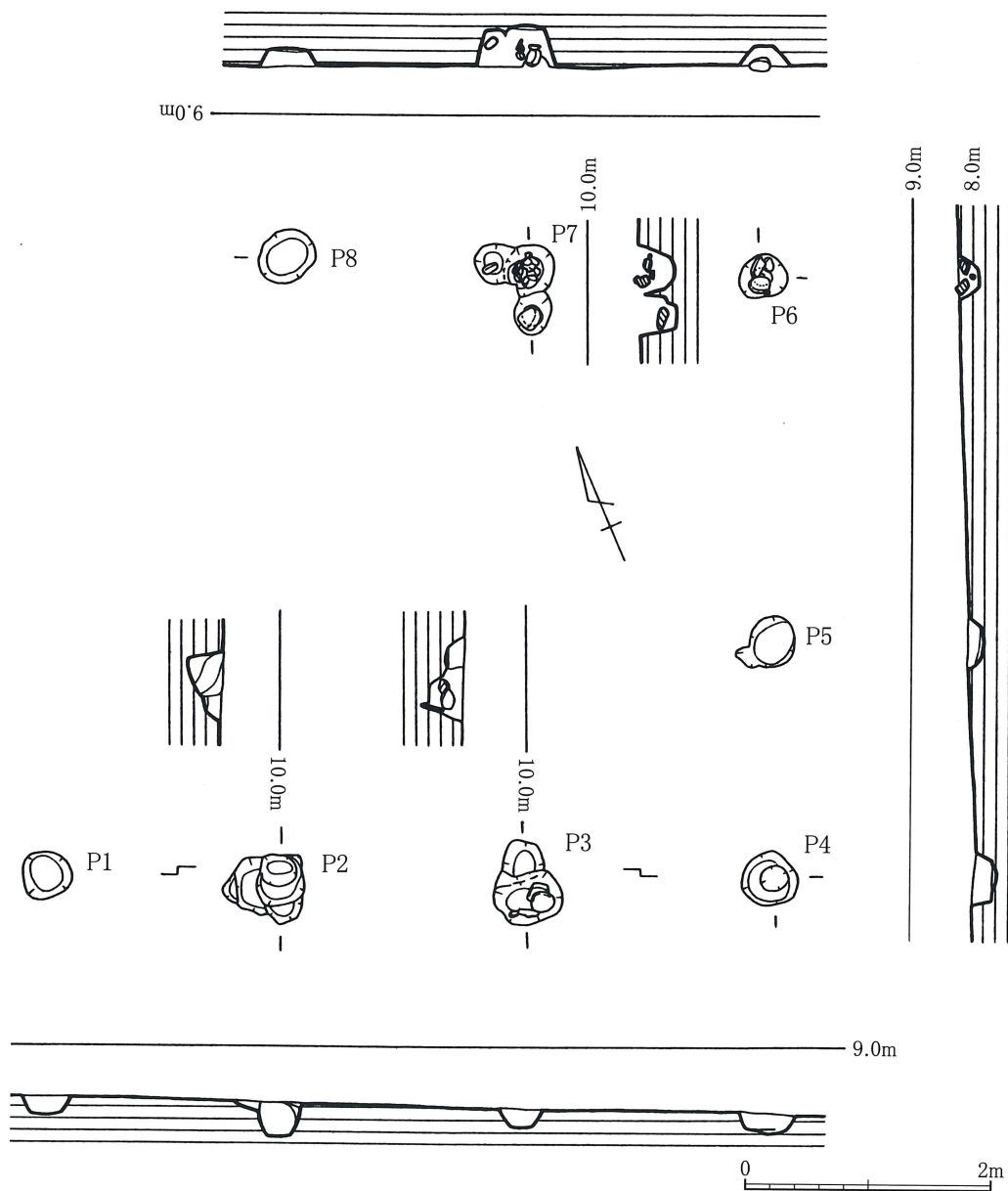
Ⅲ区南部に位置する2間×3間の建物跡である。主軸はN-67°-Wを指す。SB7 梁行き間はP4-186cm-P5・P5-296cm-P6で、平均値は241cmである。桁行き間はP1-191cm-P2・P2-200cm-P3・P3-204cm-P4・P6-195cm-P7・P7-194cm-P8で、平均値は197cmである。

出土遺物はない。

8号掘立柱建物跡 (SB8・第13図)

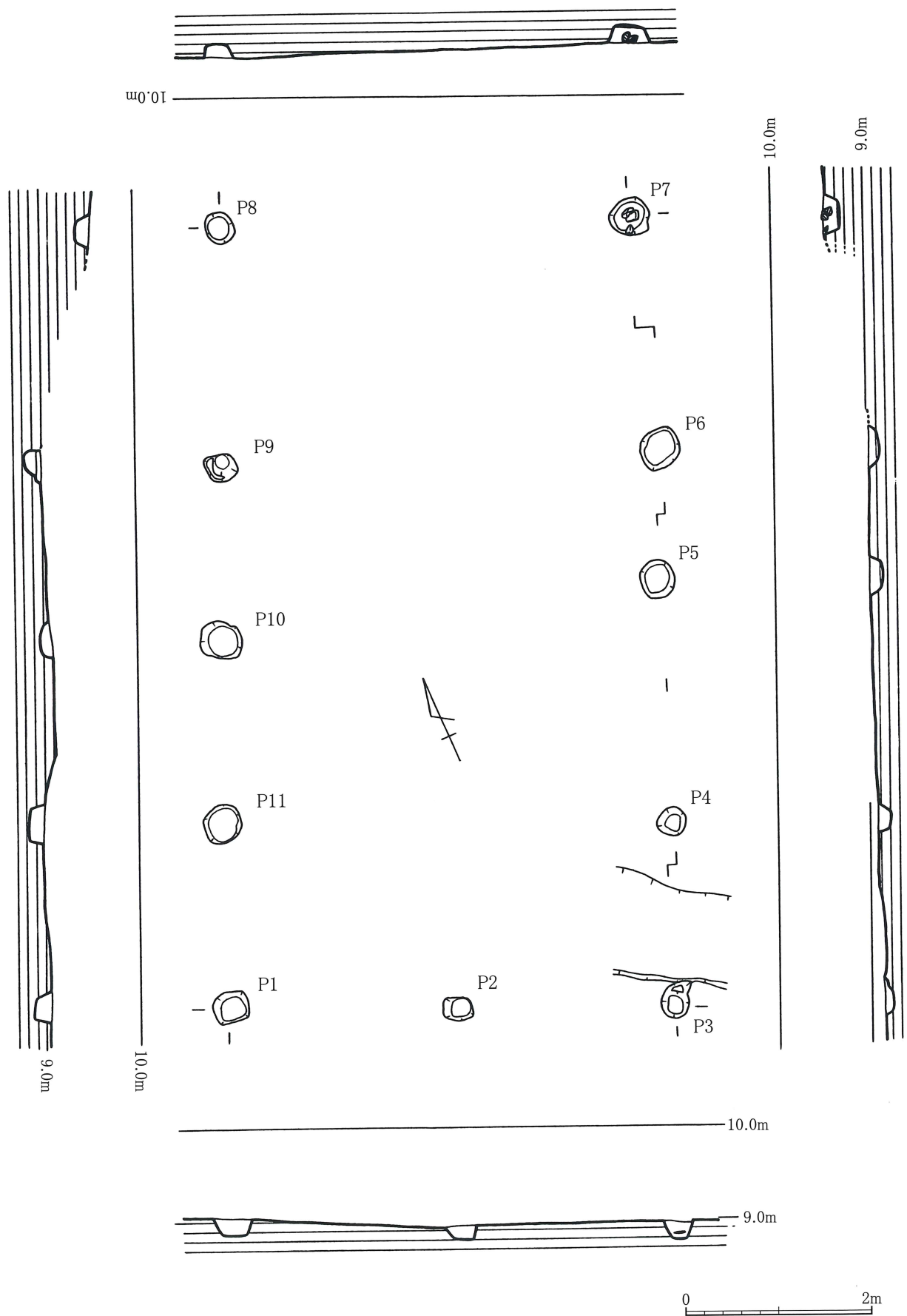
Ⅲ区南部からⅣ区北部に位置する2間×4間の建物跡である。主軸はN-22°-Eを指す。梁行き間はP1-247cm-P2・P2-233cm-P3・P7-444cm-P8で、平均値はすべて2間として231cmである。桁行き間はP3-195cm-P4・P4-263cm-P5・P5-142cm-P6・P6-247cm-P7・P8-250cm-P9・P9-193cm-P10・P10-196cm-P11・P11-199cm-P1で、平均値は211cmである。

出土遺物はない。



第12図 SB7 実測図





第13图 SB 8 实测图

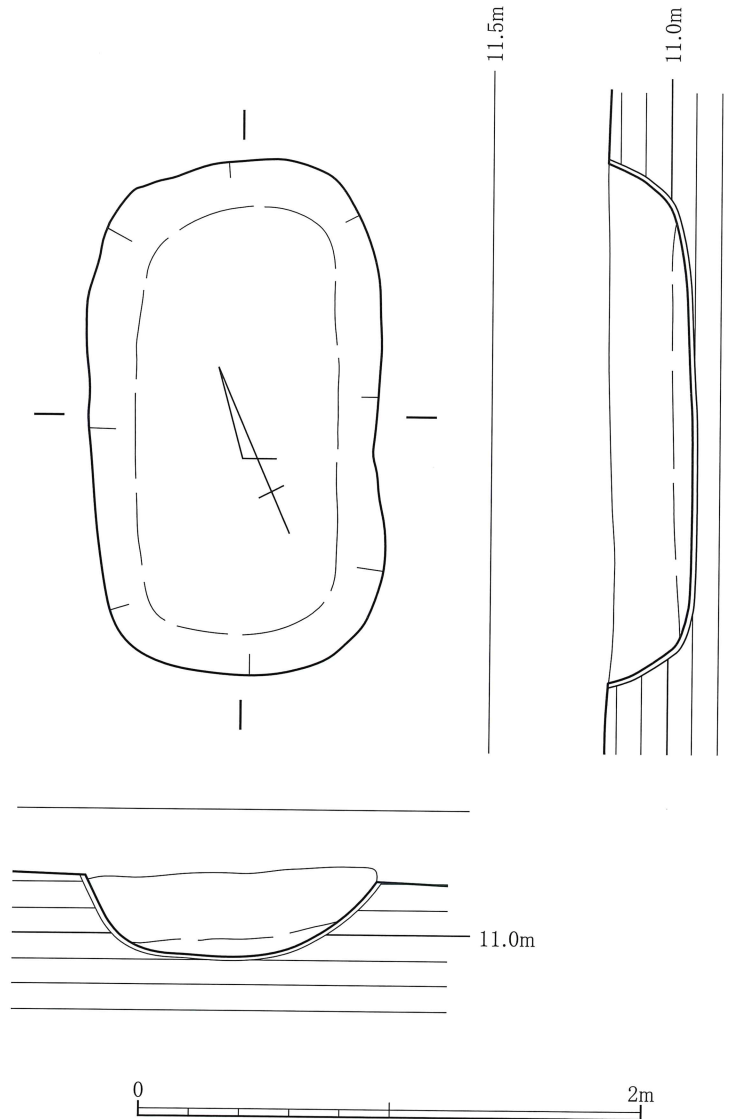
## 土坑

柱穴ではない大型の穴を土坑として記述する。合計13基あり、北部のⅠ区に6基、Ⅱ区に5基、Ⅳ区に2基が分布していた。古代に属するのは3号で、1号・4号・5号は近世かそれ以降である。残りの大半は中世であろうと考えている。

### 1号土坑（SK1）（第14図）

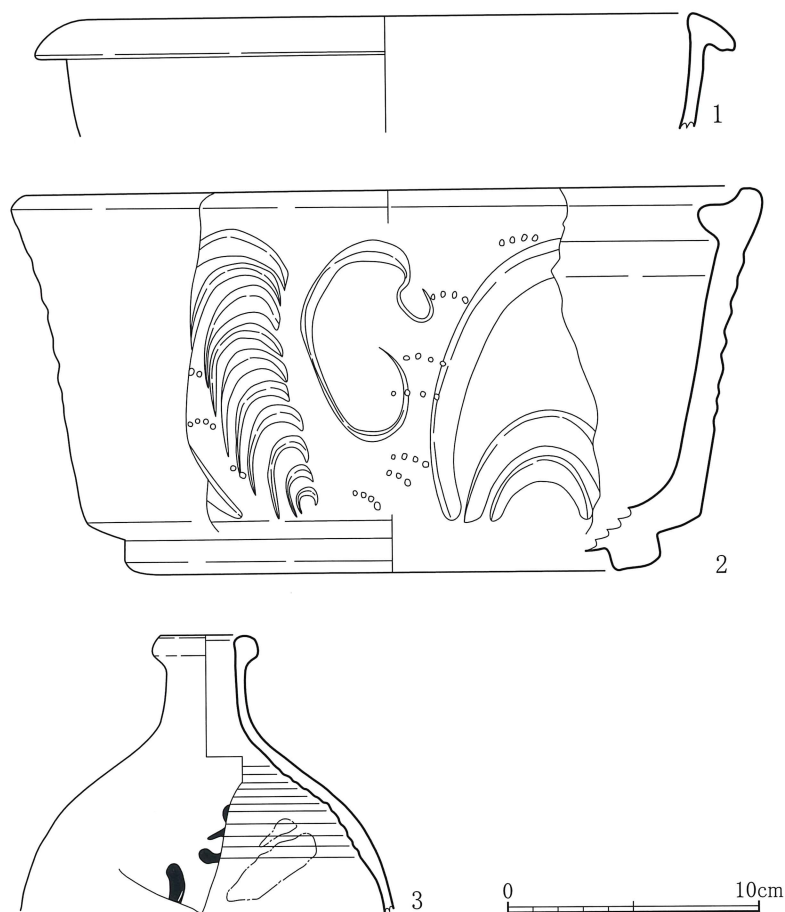
Ⅰ区の中央部に位置し、すぐ東側には4号土坑と5号土坑がある。1号土坑の壁面及び床面は厚さ3cmの三和土よりなり硬く、水漏れしない。また、壁と床は丸みを帯び、屈折することなく移り変わっている。規模は長さ203cm、幅が118cm、深さ33cmを測る。

出土遺物（第15図1～3・第16図4～6） 1は器面が磨かれた瓦質の黒色の火鉢。最大径28.0cm、口径24.2cm。2は瀬戸の水鉢。口径30.1cm、器高15.1cm、高台径21.4cm。3は徳利で白字で店の名？が書かれている。口径4.2cm。釉は黒褐色。4はコバルト色の型紙摺り製品で、段重。口径12.8cm、高さ6.6cm。明治。5は銅判転写の蓋付き筒形椀である。6は赤を基調に黄・緑を加えた銅判転写の皿。口径11.2cm。5・6は明治後半以降。

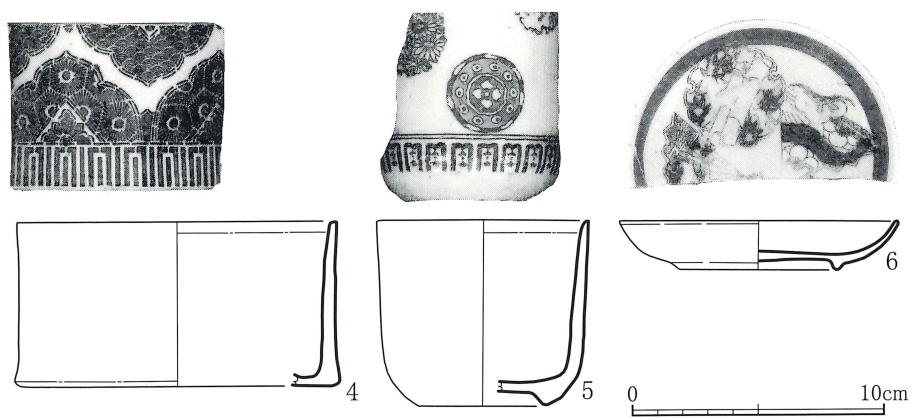


第14図 SK1 実測図





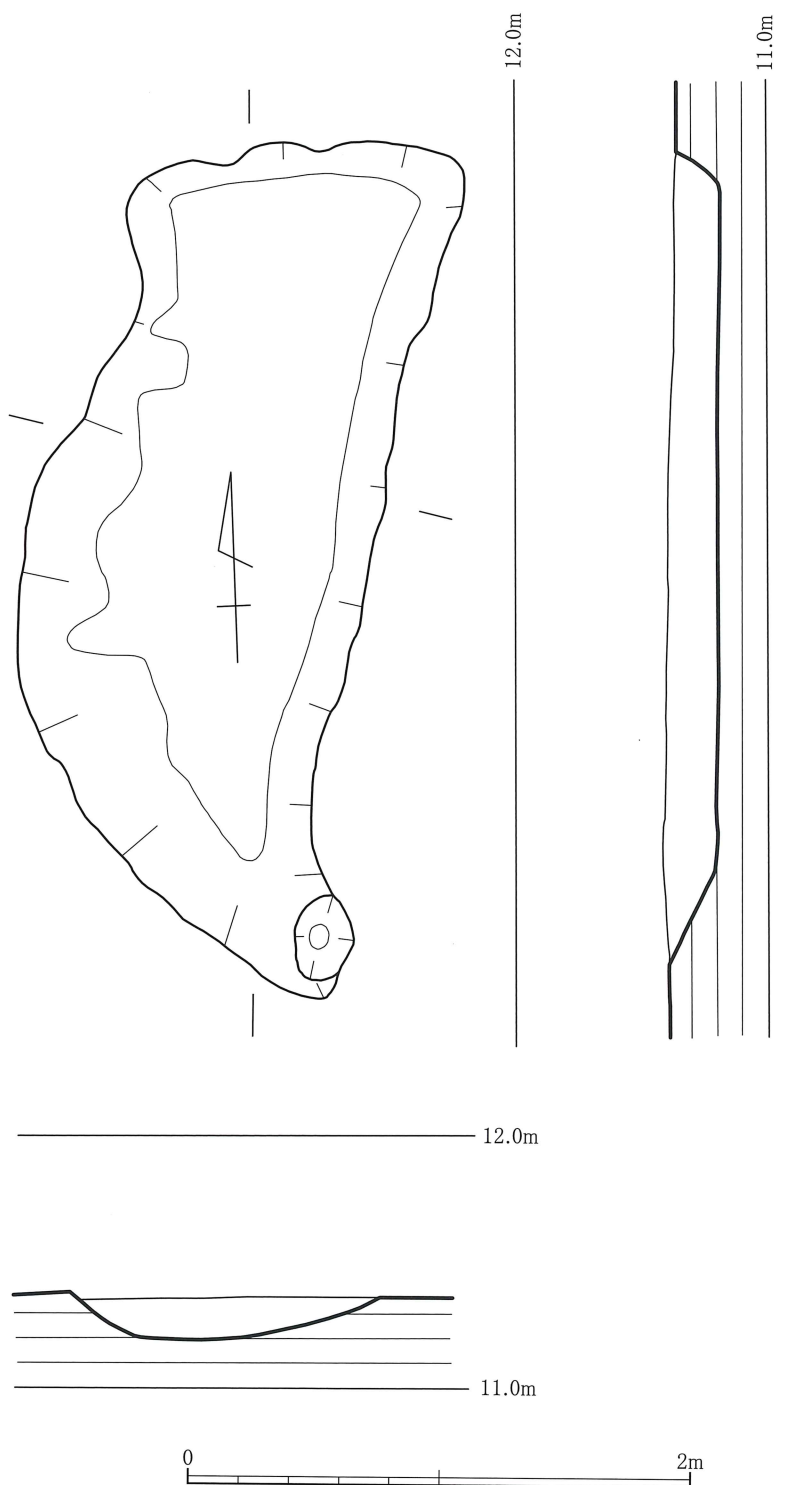
第15図 SK 1 出土遺物実測図



第16図 SK 1 出土遺物実測図

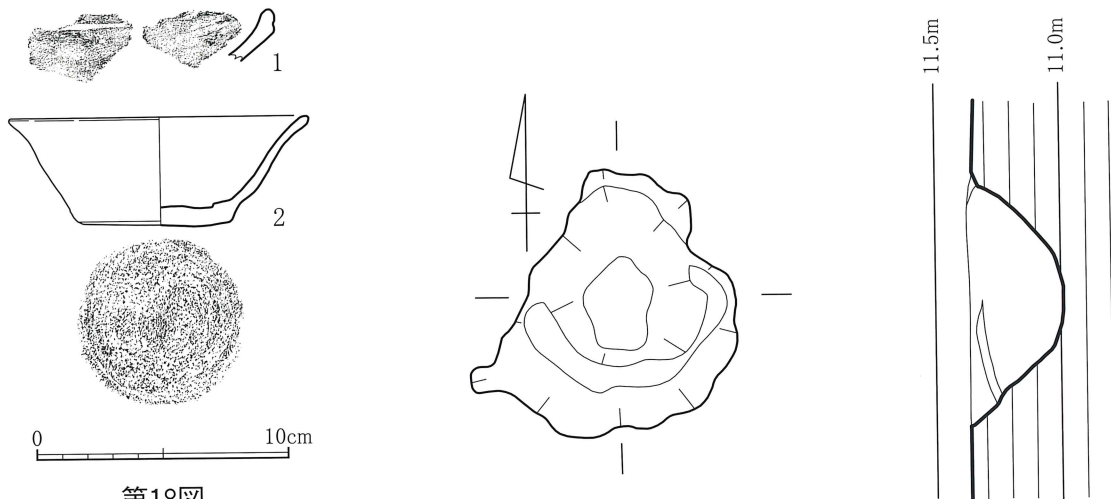
### 2号土坑（SK2）（第17図）

I区北部に位置する南北に長い不整な土坑である。出土遺物はない。長さ339cm、最大幅136cm、深さ20cm。出土遺物はない。

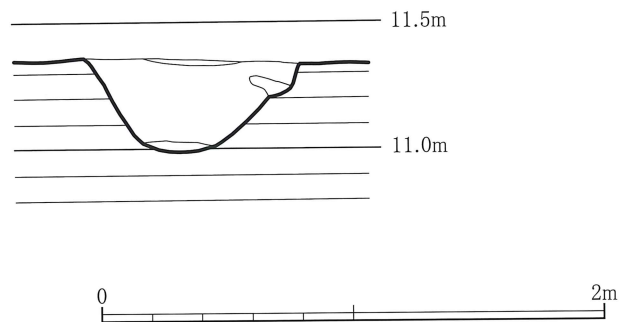


第17図 SK2実測図





第18図  
SK 3 出土遺物実測図

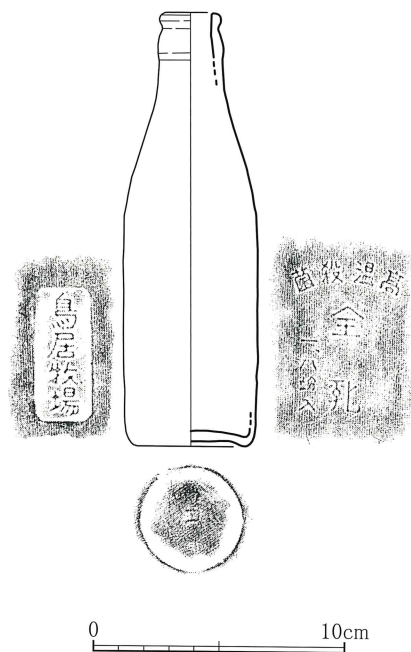
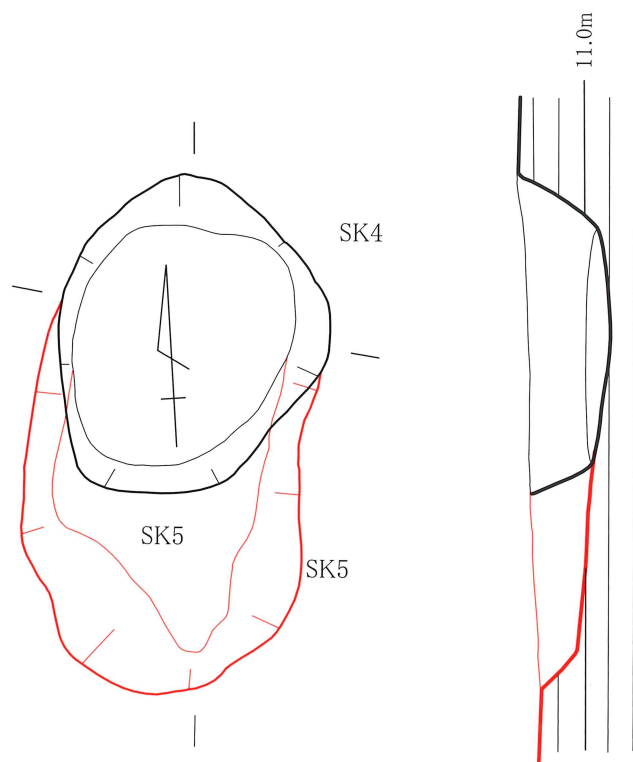


第19図 SK 3 実測図

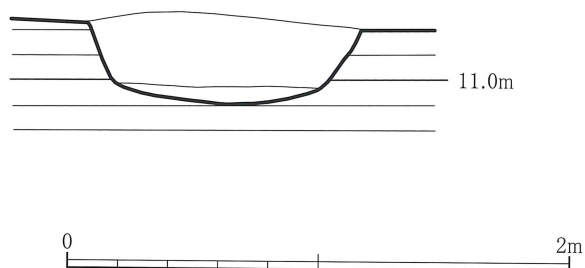
### 3号土坑（SK 3）（第19図）

I区の北部に位置し、西側には2号土坑がある。平面形は不整な円形で、一部二段掘りになっている。規模は長さ107cm、幅106cm、深さ37cmを測る。

出土遺物（第18図1・2） 1は内面磨き、外面なで調整、口縁部に沈線のある縄文晩期の浅鉢。2は口径11.9cm、底径5.6cm、器高4.2cmを測る。底部の調整はへら切りで、9世紀の土師器杯である。3号土坑の所属時期を示す遺物であろう。



第21図 SK 5 出土遺物実測図



第20図 SK 4・5 実測図

#### 4号土坑（SK 4）（第20図）

I区の中央部、1号土坑の東側にある。5号土坑と重複し、5号土坑よりも新しい。平面形は不整円形で、長さ126cm、幅107cm、深さ36cmである。現在の馬車部品の鉄製品が出土した（図化していない）。

#### 5号土坑（SK 5）（第20図）

出土遺物（第21図） 無色透明ビン。側面に「菌殺温高」「全乳」「一、八立分入」「鳥居牧場」、底面に山形の下に「ウコ」の字が浮き出ている。栓は王冠使用である。口径2.5cm、高さ17.1cm、最大径5.4cm。

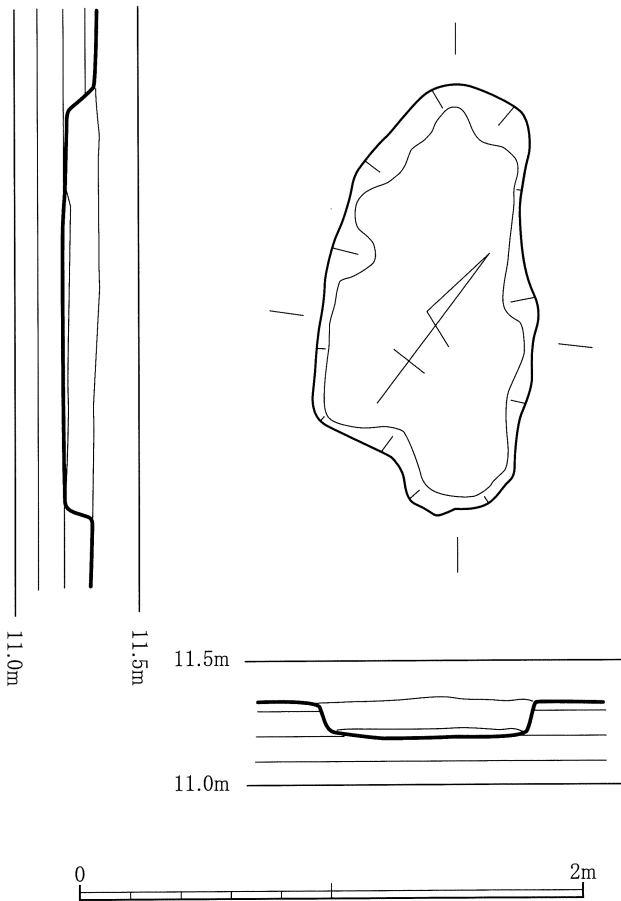




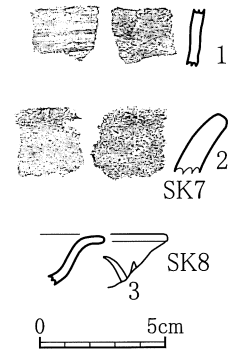
第22図 SK 6 実測図

### 6号土坑（SK6）（第22図）

IV区の北部、2号土坑の南側に位置する不整形の土坑である。西半部と東半部は別の遺構であろう。東部を6号土坑とする。6号土坑は二段掘りになっていて、浅い土坑と柱穴が重複している可能性がある。浅い部分の規模は長さ98cm、幅109cm、深さ9cmである。出土遺物はない。



第23図 SK 7 実測図



第24図 SK 7 出土遺物実測図

### 7号土坑（SK7）（第23図）

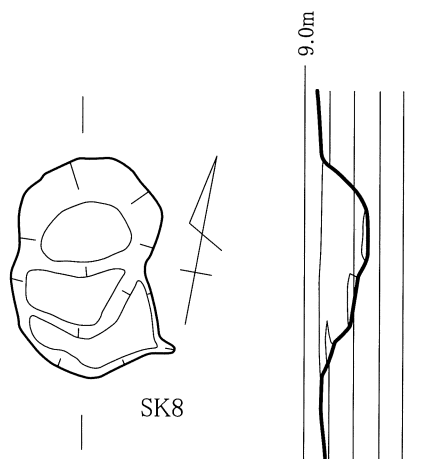
I区の北部、3号土坑の西側に位置する。平面形はややいびつで、それからみて2基の土坑の重複があるのかも知れない。長さは188cm、幅は85cmで、床面は平坦で深さ15cmを測る。

出土遺物（第24図1・2） 1は内面なで、外面二枚貝条痕の縄文晩期土器。2は弥生あるいは古代。

### 8号土坑（SK8）（第25図）

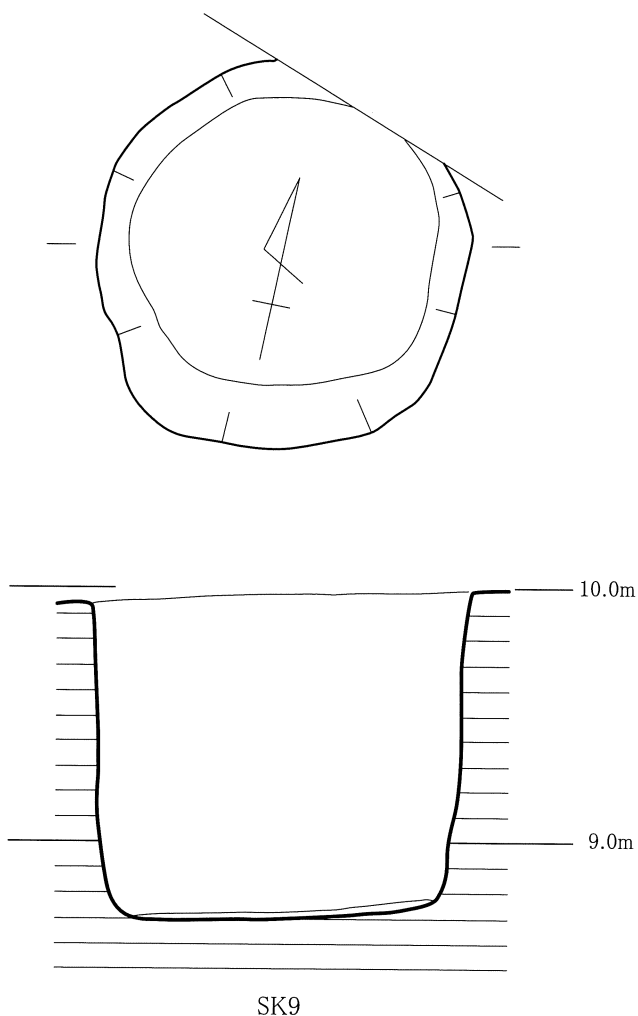
IV区の北東部にあり、6号溝状遺構の北に位置する。三段掘りになっていて、重複の可能性がある。規模は長さ87cm、幅57cm、深さ18cmである。

出土遺物（第24図3） 13世紀の中国製青磁皿で、外面にへらで蓮弁紋の輪郭を描く。

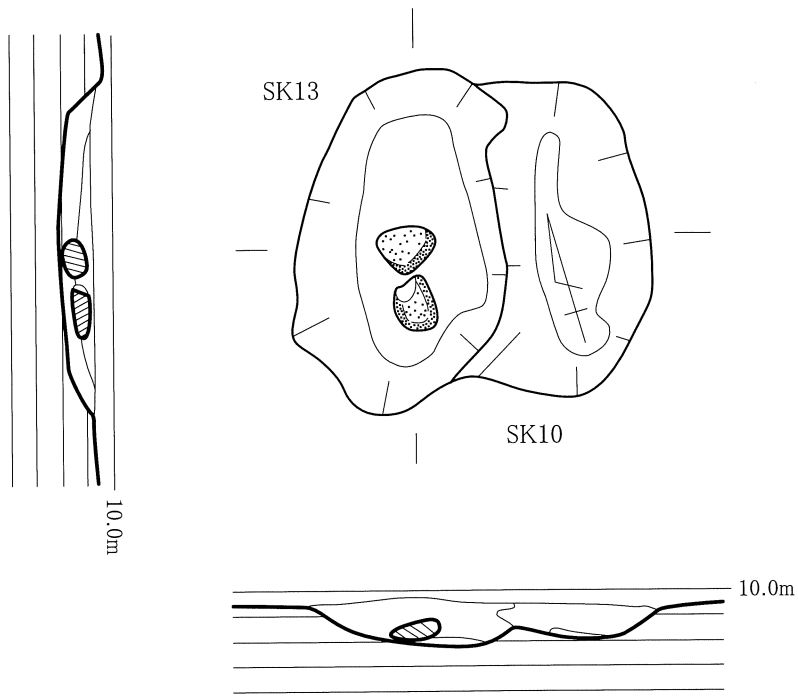


### 9号土坑（SK9）（第25図）

II区の南東部に位置する円形の深い土坑である。久保田遺跡の中世以降を覆っていた黒色土が内部を充填していた。壁はまっすぐに立ち上がり、3号井戸のような壁面上部の崩落は認められない。規模は東西150cm、南北154cm、深さ128cmを測る。



第25図 SK8・9実測図

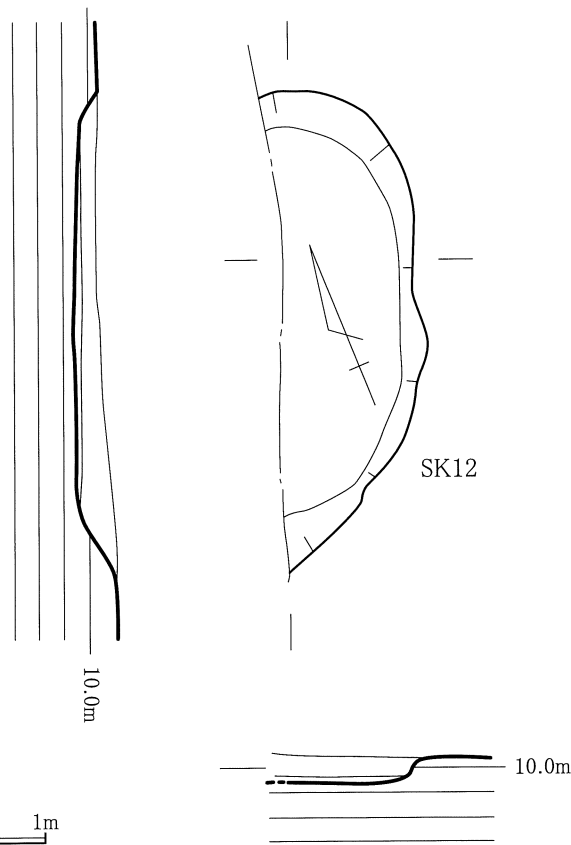


10号土坑 (SK10)  
(第26図)

Ⅱ区の中央西部に位置し、13号土坑と重複する。長さ124cm、幅83cm以上、深さ12cmを測る。出土遺物はない。

11号土坑 (SK11)  
(第27図)

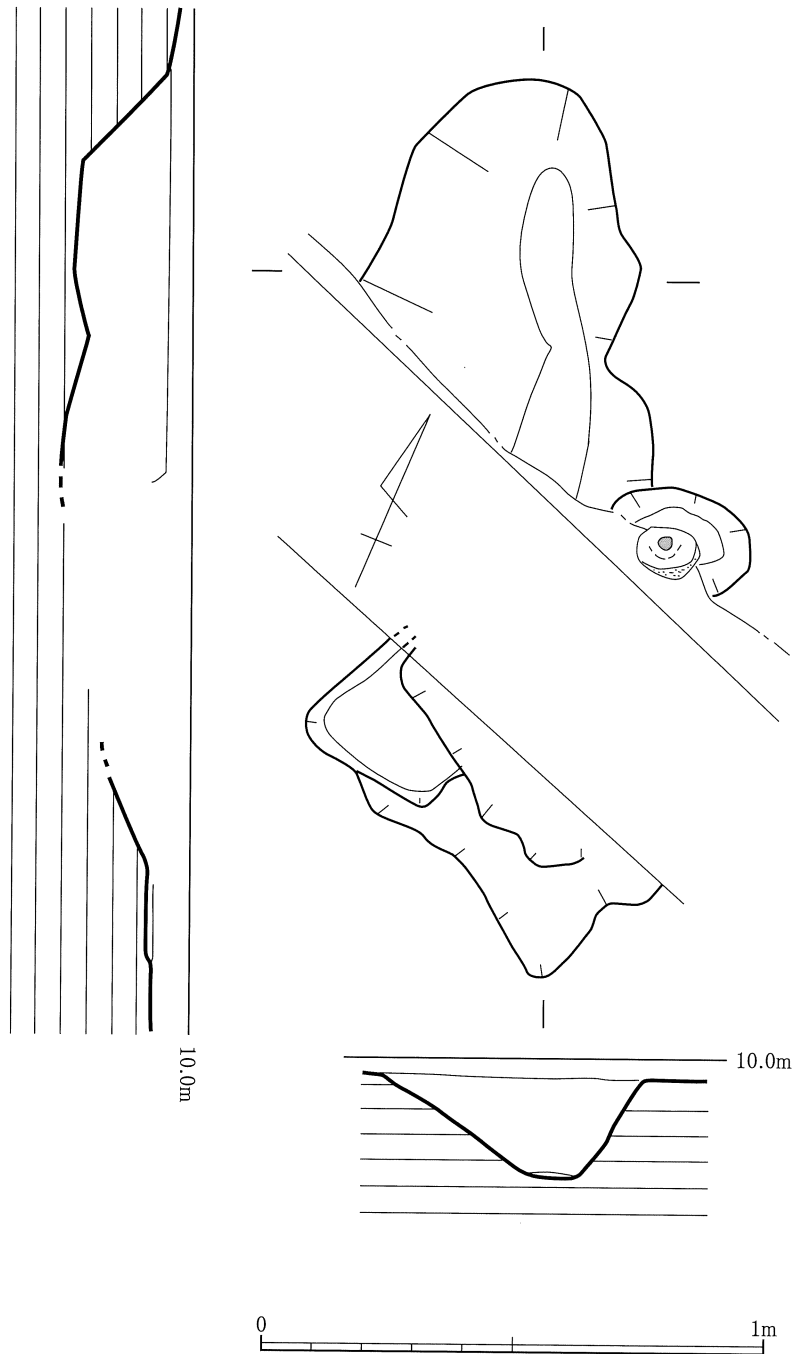
Ⅱ区とⅢ区の境界に位置し、土坑の一部はコンクリート壁に潜り込んでおり、複数の重複の可能性が有る。出土遺物はない。



0 1m

第26図 SK10・12実測図





第27図 SK11実測図

12号土坑（SK12）（第26図）

I区の13号土坑の南側にあり、遺構は調査区外に延びている。現状の規模は長さ190cm、幅66cm、深さ15cmである。出土遺物はない。

13号土坑（SK13）（第26図）

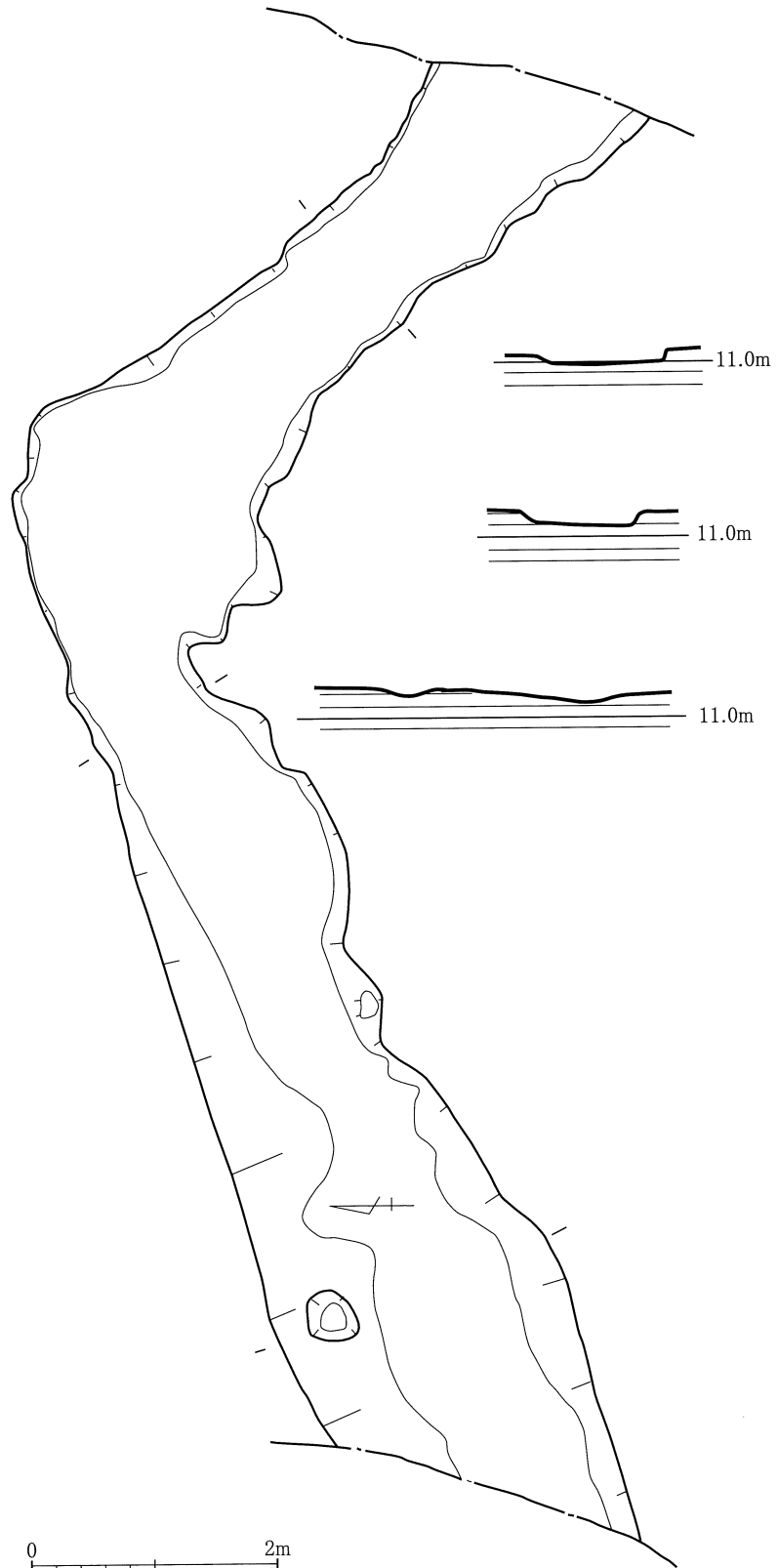
10号土坑と重複する。出土遺物は円礫2点だけである。規模は10号土坑と同程度で、長さ140cm、幅84cm、深さ18cmである。

## 溝状遺構

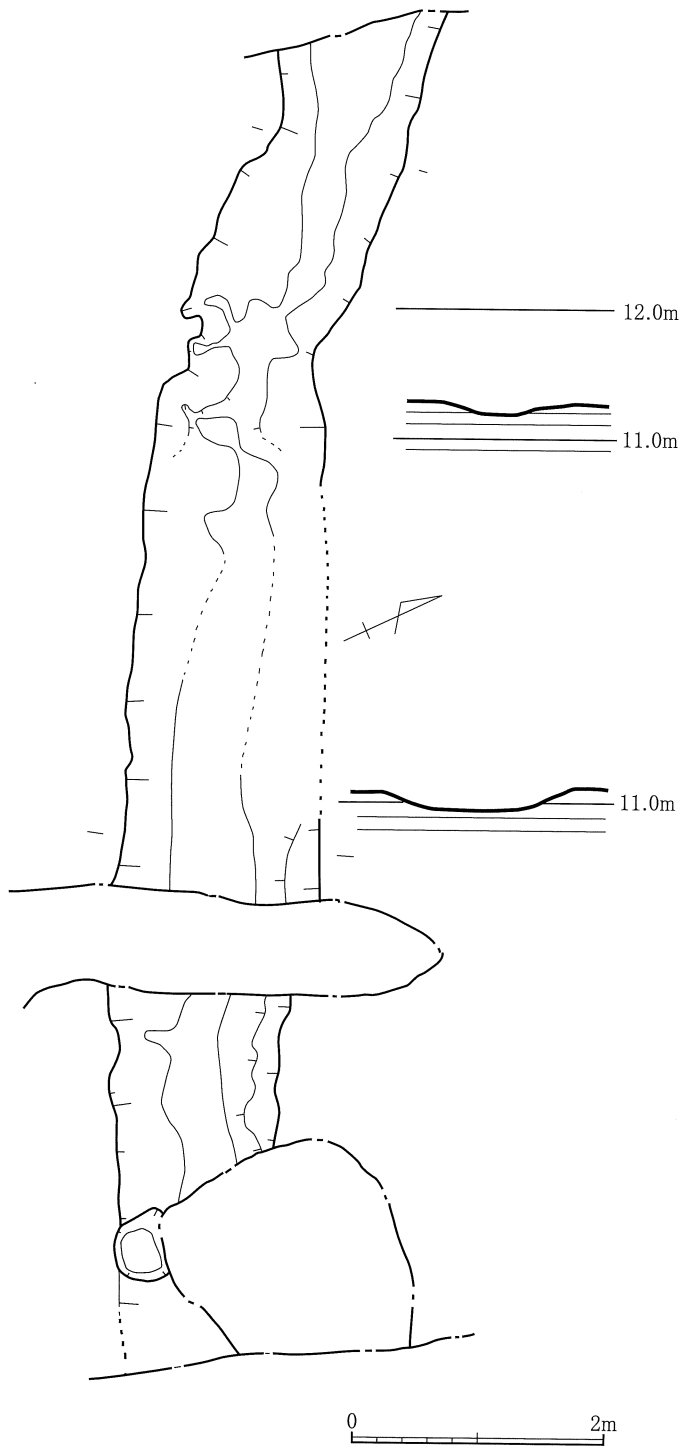
I区～IV区で合計9条の溝状遺構を検出した。溝の方向は基本的に東西方向を示し、地形の傾斜と同じ向きになっている。したがって、久保田遺跡では湧水が多いのでその排水施設の機能を帯びたものが多いようである。逆に南北方向に走る溝状遺構は認められなかった。また、調査区内中央部付近で多数の掘立柱建物跡が分布していたが、これらを区画する西側及び東側の溝も存在するとみられるが、細長い調査区であったため今回の調査区内では検出していない。

### 1号溝状遺構（SD1） （第28図）

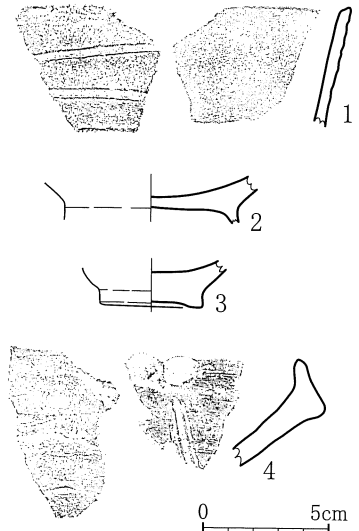
I区中部に位置する。全体の形は「く」字形に折れ曲がり、幅は最大235cm、深さは最大13cmである。床面は西に高く、調査中常に水が流れていた。



第28図 SD1実測図



第29図 SD 2 実測図



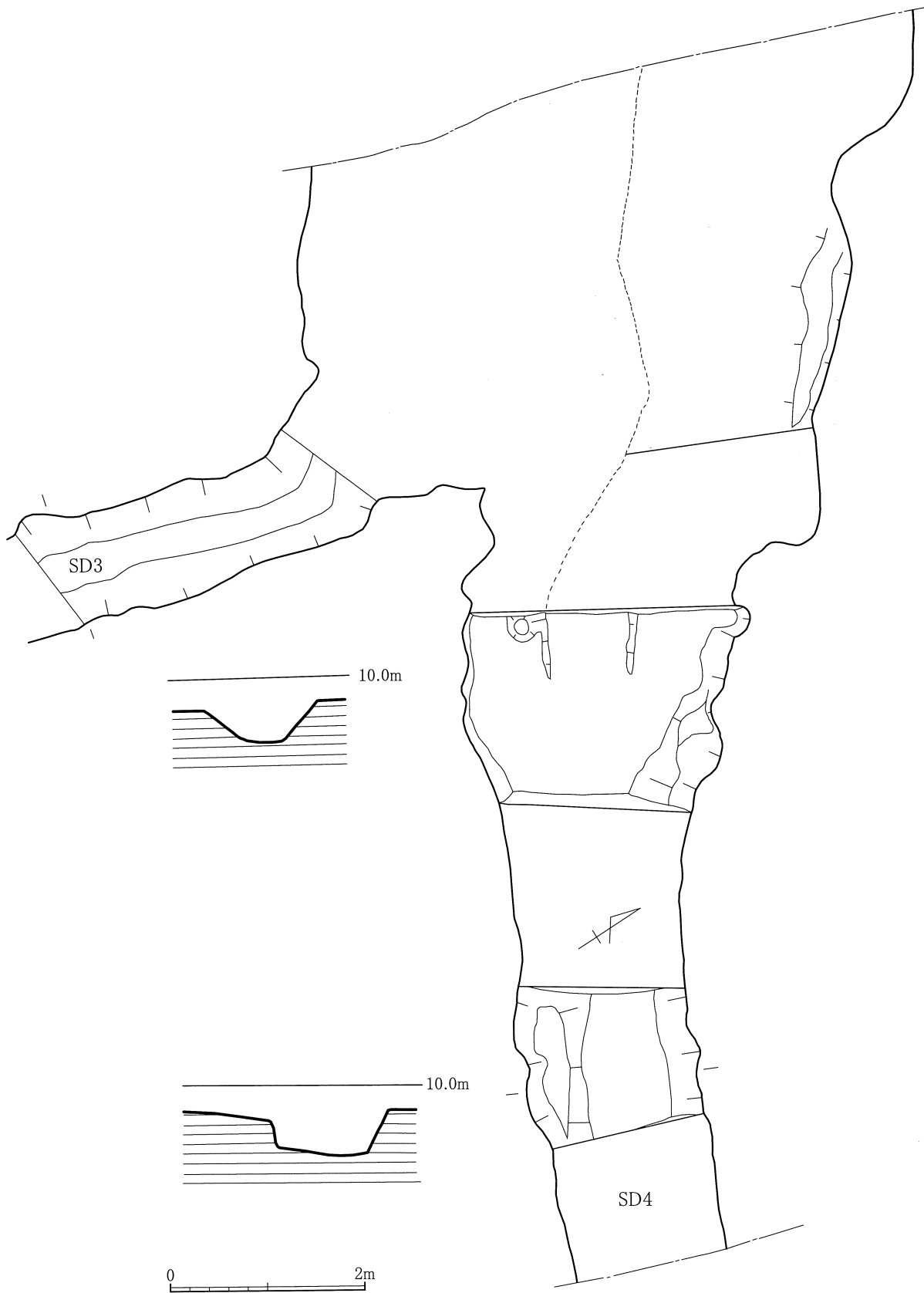
第30図 SD 2 出土遺物実測図

#### 2号溝状遺構 (SD 2) (第29図)

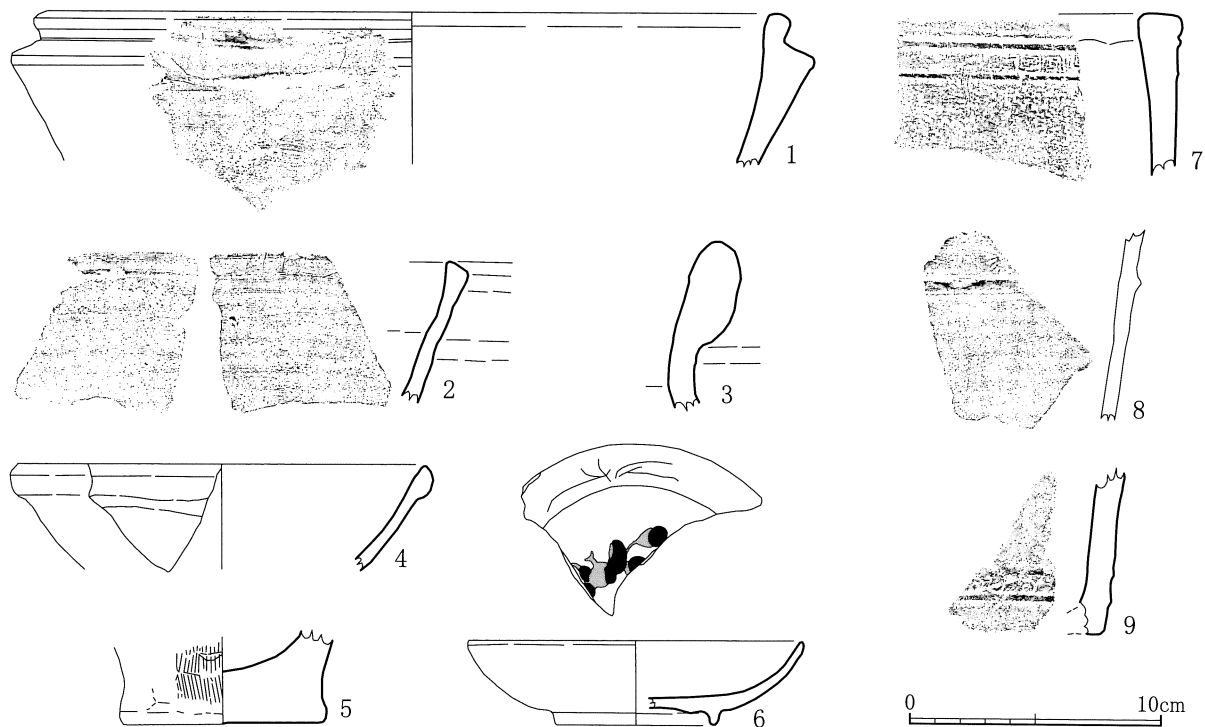
I区中央部に位置し、北西から南東に緩く弧を描くように走る。幅は100cm～150cm位、深さは15cm程度である。床面の高さは西側が高く、東側に低くなる。中央部には中世の井戸 (SE 3) が重複し、すぐ東側を民家の境界であるコンクリート壁が破壊していた。

出土遺物 (第30図 1～4) 1は外面に沈線 (下端にもある) の模様をもつ縄文晩期の土器。内面は磨き、外面はなで調整。2・3はなで調整の土師器、4は瓦質のすり鉢。





第31図 SD3・SD4実測図

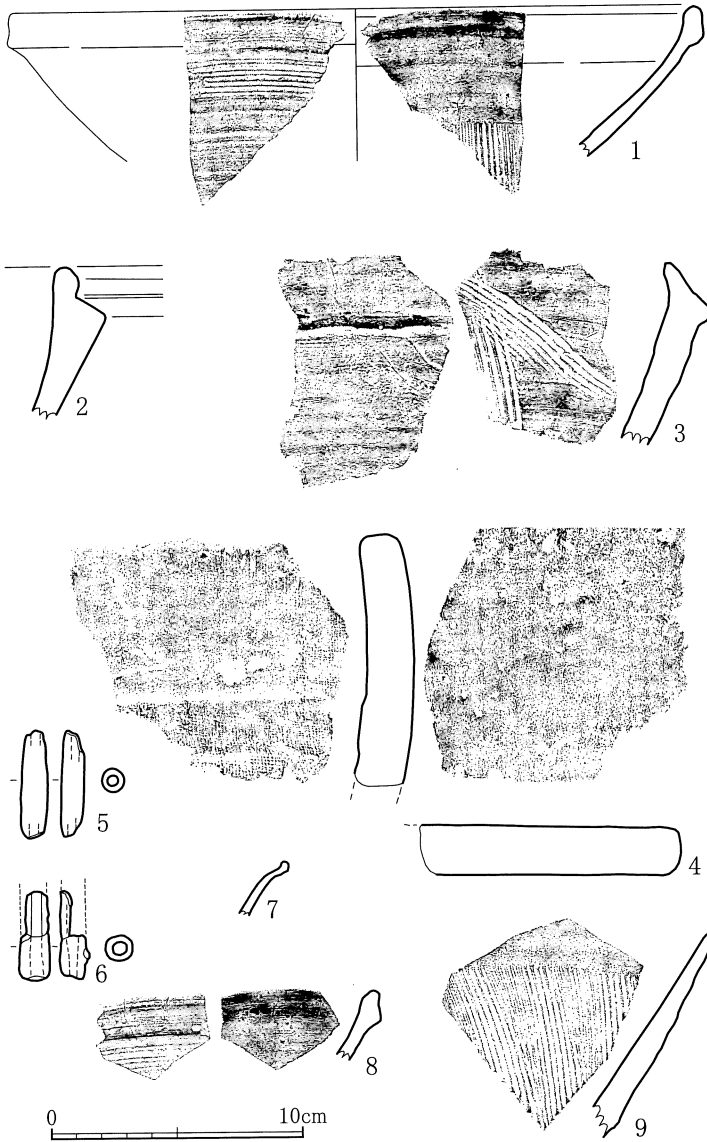


第32図 SD 3 出土遺物実測図

### 3号溝状遺構（SD 3）（第31図）

IV区の南西部にあって南北に2.5m走りそこで東西に曲がる。北部では4号溝との間に円礫が集積、あるいは廃棄されたような状態で存在する部分があり、これによって切られていた。南部は自然地形の傾斜によって、溝は消滅していた。ただ、調査の際、排水のため南端部は重機により排水路をつくったため図示したものより1m弱長かった。3号溝の上面幅は1.1m前後で深さは約35cmである。北側の礫集積部は常時満水状態だったため、この部分の掘り下げは行っていない。3号溝状遺構もそこからの流水が絶えなかった。

出土遺物（第32図1～9） 1・2、7～9は瓦質土器である。1は火鉢、2はすり鉢、7は火鉢で、2個一組の雷紋の刻印がある。8には放射状の刻印が、9には左右の渦紋を組み合わせた内部に斜め沈線3本がある。3は備前焼甕。以上は16世紀代のものである。4は12世紀前後の中国製白磁。5は弥生時代中期頃の甕形土器の底部。6は近世の肥前産磁器。6によればSD 3の所属時期は近世と考えられるが、中世のものも少なからず出土しているのでこれより遡る可能性も捨てきれない。



第33図 SD 4 出土遺物実測図

4号溝状遺構 (SD 4)

(第31図)

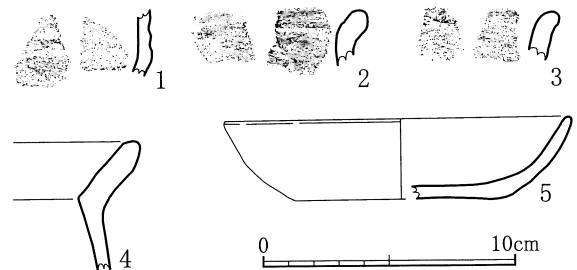
IV区の南部に東西方向に走る溝状遺構である。東側で幅が狭くて160cm、中央部分では二本に分かれたようになり合わせて幅約280cmである。深さは深い部分で52cmある。西部では湧水のため常時どろだらけの調査となり、部分的調査とした。

出土遺物 (第33図1~9)

1・8・9は近世のすり鉢、2は中世の火鉢、3は16世紀の中頃以前の備前焼すり鉢。4は内面に桶巻き痕の布目圧痕がついた平瓦。中世であろう。5・6は土錘。7は赤い土師器杯で9世紀のもの。

5号溝状遺構 (SD 5) (第5図)

IV区東南にある溝状遺構である。東西5.4mにわたり二箇所途切れて並んでいる。真ん中の土坑状部分は南側にある攪乱により切り込まれている。床面の深さは西から東に傾斜しており、西部で深さ2cmと浅く、東部で深さ6cmである。幅は最大43cmを測る。出土遺物はない。



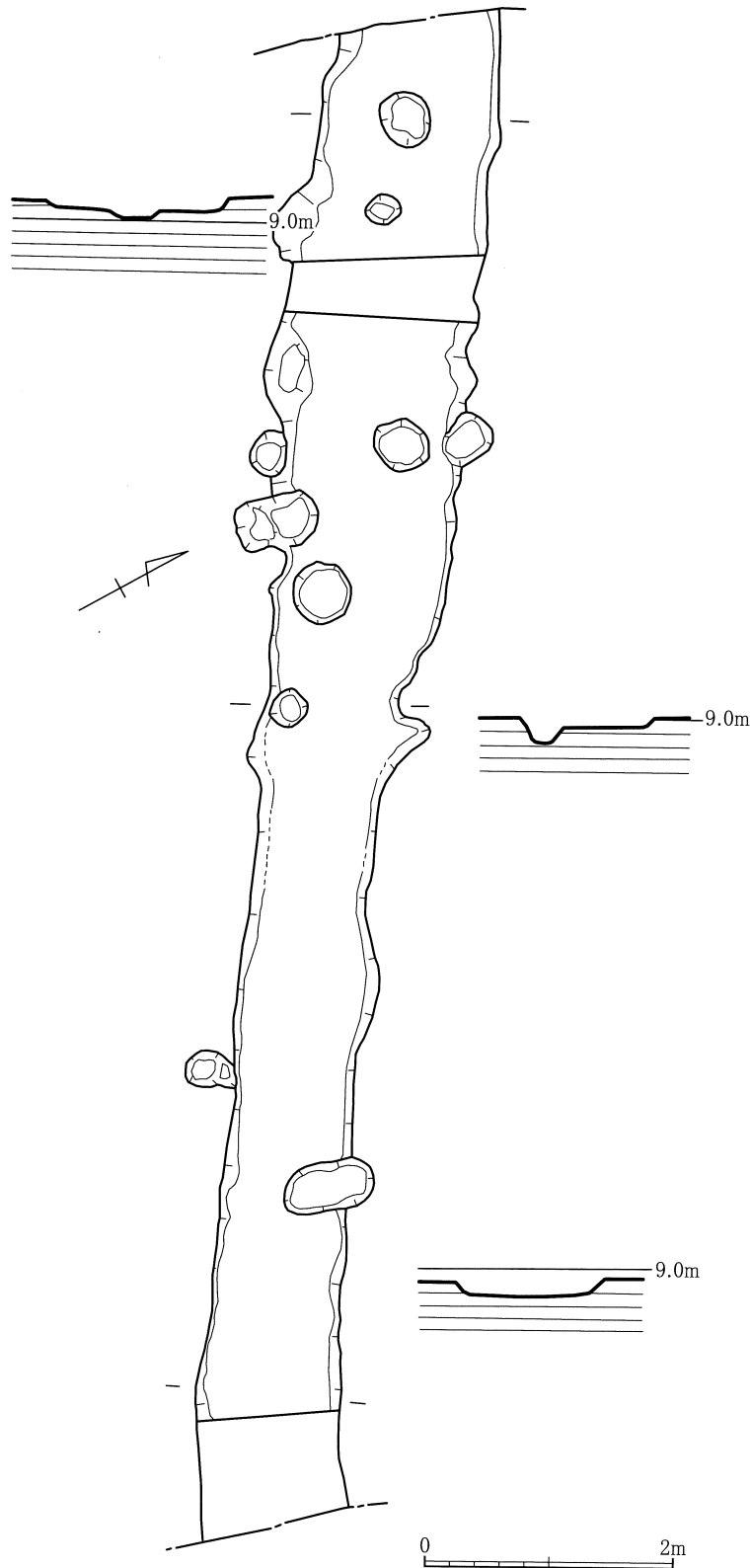
第34図 SD 6 出土遺物実測図



## 6号溝状遺構 (SD6)

(第35図)

IV区の北部に位置し、N-56°-Wの方向に直線的に走る溝状の遺構である。幅は172cm~94cmで、東部はほぼ100cm程度に一定する。深さは15cm前後で、床面は西が高く、東に下がる。

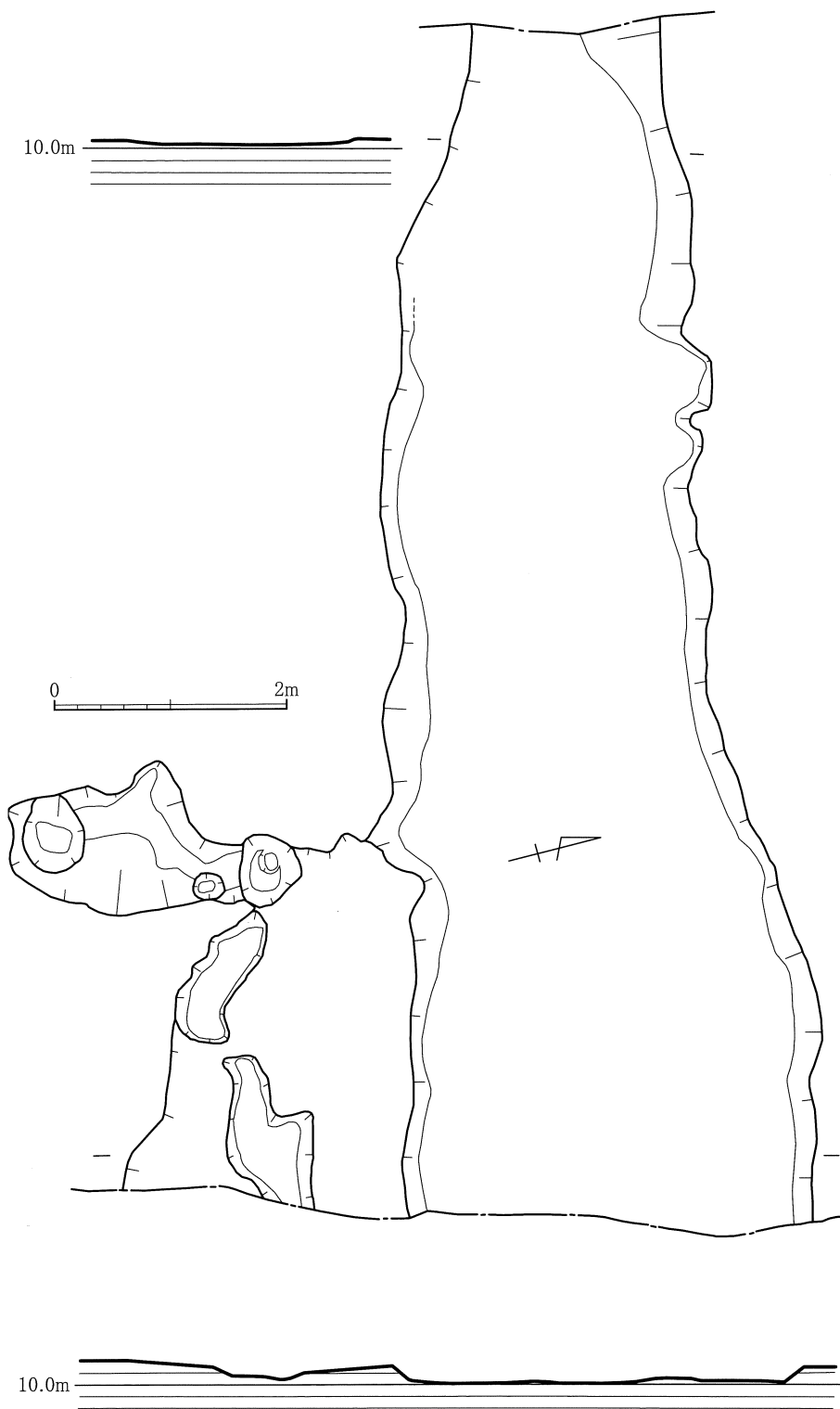


第35図 SD6実測図

## 出土遺物 (第34図1~5)

1は幅広い沈線が2条巡る。縄文晩期の深鉢か。2~5は土師器で、2~4は甕形土器で、4は奈良時代から平安時代初めの時期に、北九州を含む豊前から豊後地方に分布する「企救型甕」である。

(佐藤2001) 5は杯で、内外面ともなで調整している。口径13.8cm、底径6.4cm。これらは9世紀頃のもの。



第36図 SD 7 実測図

7号溝状遺構  
(SD 7) (第36図)

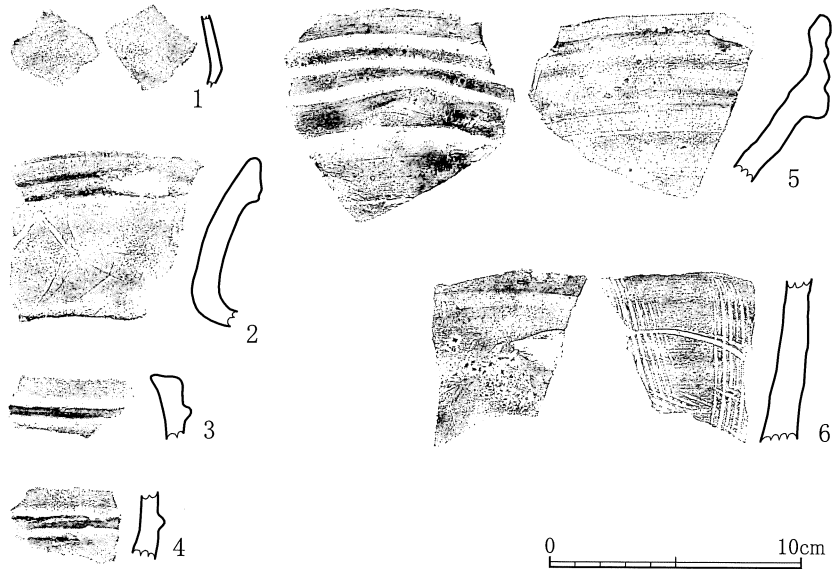
II区の北部を東西方向に走る溝状遺構である。深さは最大15cm程度しかない。上面の規模は西部で幅160cm、東にゆくにつれて広がり東端部で幅350cmとなる。床面の高さは緩やかであるが西側の方が高い。南側の8号溝状遺構からは4m弱距離がある。埋土から少量ではあるが中世を中心とした遺物が出土した。

出土遺物  
(第37図 1～6・38  
図 7～10)

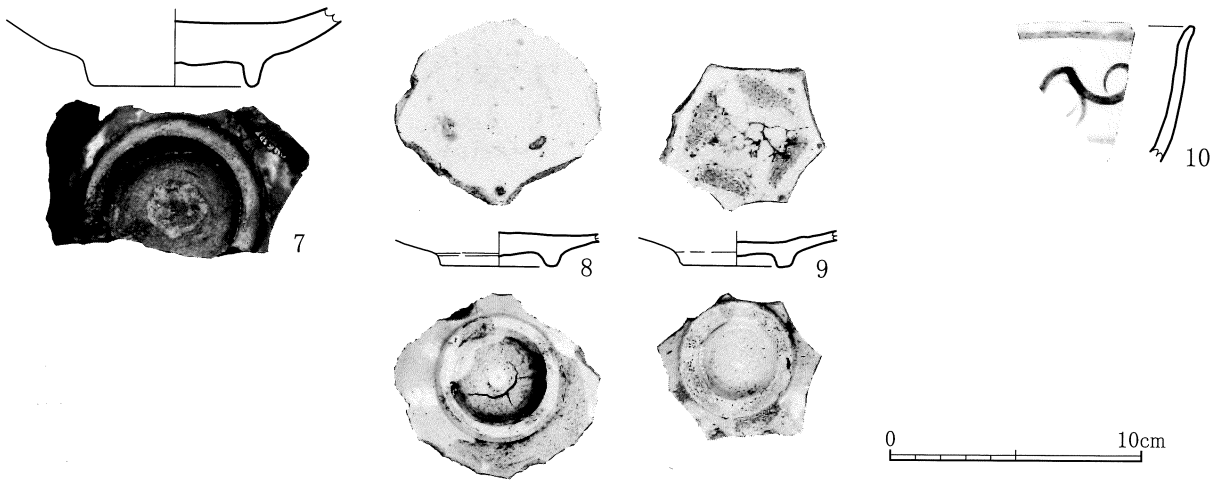
1は縄文晩期の鉢形土器。2は古墳時代頃の須恵器の甕。3・4は中世の瓦質の火鉢。5・6は中世の備前焼のすり鉢。7は竜泉窯青磁椀。高台内面は輪状に赤茶色の地が見える。8・9は白磁皿で、見込みと畳付きに砂目積み跡が4個ある。10は肥前系染付けで、17世紀代のもの。

8号溝状遺構 (SD 8) ・ 9号溝状遺構 (SD 9) (第7図)

II区の中央部にあり、2号掘立柱建物跡の南北を囲むように平行に走る。相互の距離は溝の中心で測って東部で8.3m、西部で8.9mを測る。上面の幅は30cm前後で、深さは最大8cmである。内部には砂が堆積していたので、水が流れることもあったらしい。



第37図 SD 7 出土遺物実測図



第38図 SD 7 出土遺物実測図

### 井戸

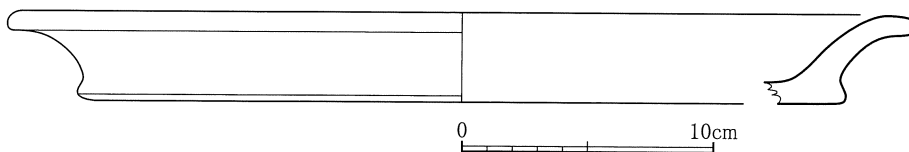
I区だけに5基の井戸（1～5号井戸）が分布した。1号井戸・2号井戸・5号井戸は調査直前まで使われていた現代の井戸で、埋めてなかった1号、埋めていたが少し内部を掘り下げた2号は常に水が湧いていた。

#### 1号井戸（SE1）

I区の北部から中央部にかかる場所に位置する現代の井戸である。

#### 2号井戸（SE2）

コンクリート桶を使用した現代の井戸である。内部は埋まっていたので少し浚った時に出土したのが次の遺物である。第39図は素焼き製品で口径36.2cm、底径30.5cm、高さ3.6cm。外底面以外は横方向のなで。近世かそれ以降のものか。



第39図 SE 2 出土遺物実測図

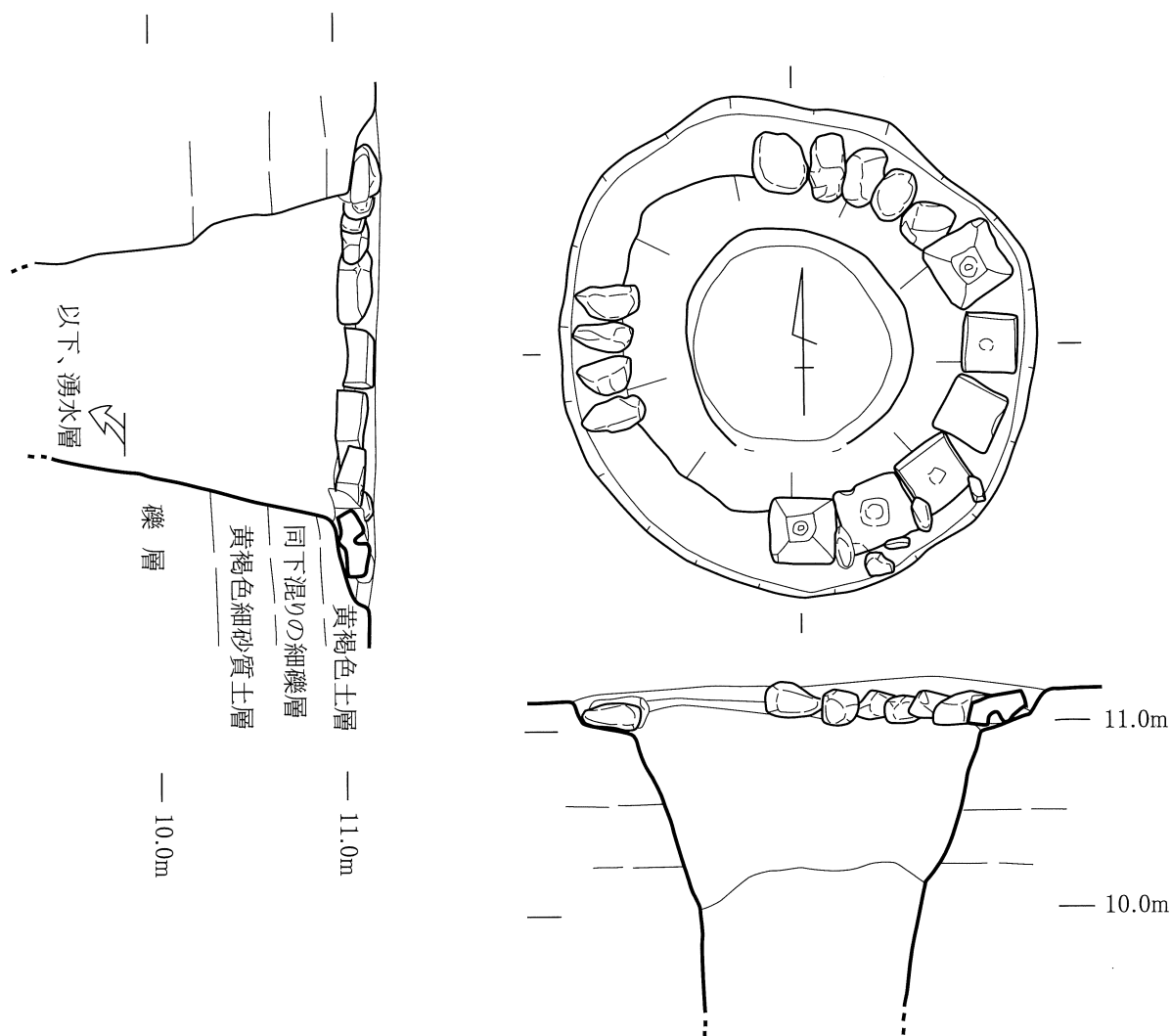
### 3号井戸（SE3）（第40図）

I区の南部に位置する井戸で、2号溝状遺構を切って作られている。平面形は円形で、直径は約2.6m、内側に石を敷き詰めて踏み場になっている。そのうち東から南にかけては五輪塔の部品を転用している。踏み場の内径は約1.8mを測る。全体の断面形をみると検出面から1m程のところで壁の傾斜が変わるが、上側は使用時に自然に少しずつ崩落したものであろう。下部の壁面を上延ばして推定すれば、本来の上面の内径は1.4m程度であろう。検出面まで人為的に埋められ、内部から多量の河原石が出土した。石は20cm～30cm程度のものが多く、ほとんど焼けて赤く変色しており、割れたものもかなりあった。下記の遺物が混入していた。

湧水量が多く常時ポンプを使用する状態だったため、完掘はしていない。

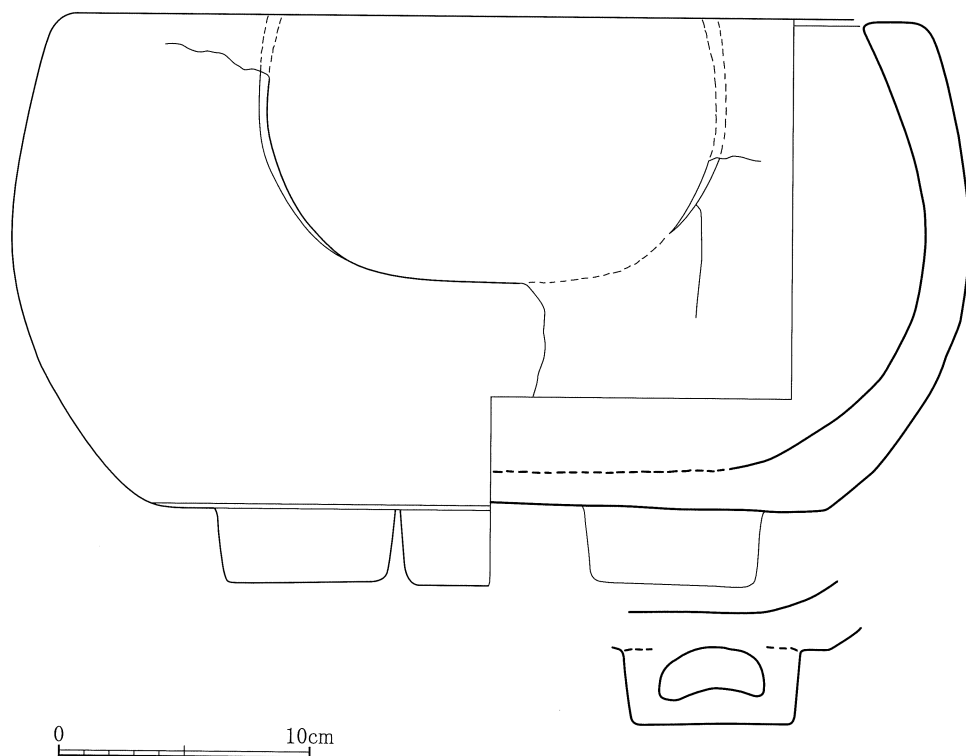
#### 出土遺物（第41～47図）

第41図は厚手の素焼き製品である。表面はもれなくへら磨きされている。平坦な底部に径7cm、高さ3cmの円形の脚が3個付き、上半部には半円形の窓が開いている。茶道具の風炉である。口縁部は内径29.6cm、外径34.6cmで脚を除いた高さは19.5cm、全体の高さは22.4cm、底径は26.8cmである。第42図は瓦質の火鉢で、口縁部と胴下部と脚部の破片がある。口径は35.5cm、底部の径は31.0cm。口縁部外面には細い突帯が2条ある間に、雷紋2個組みの刻印が三箇所残る。底部は細い突帯状部分の上位に図にあるような渦2個を左右に組み合わせた模様の刻印がある。第43図は備

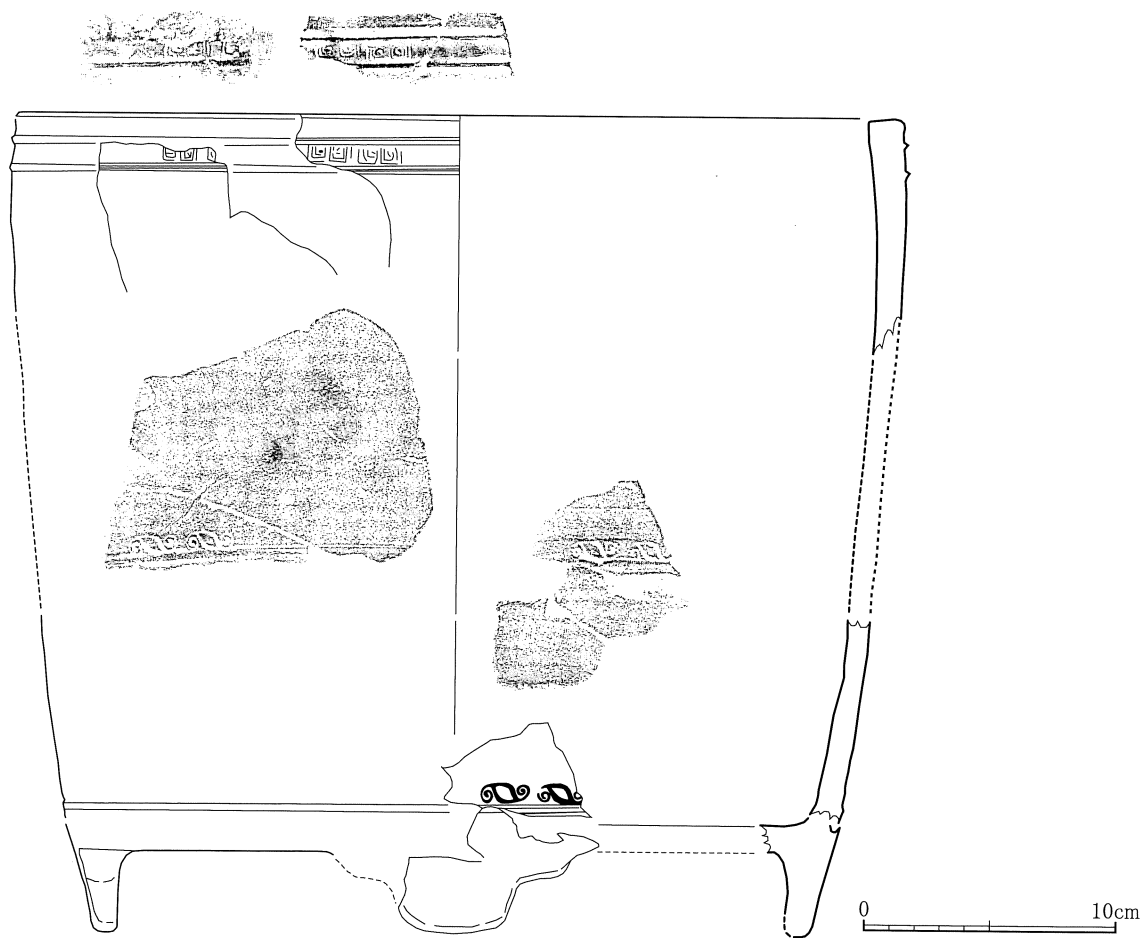


第40図 SE3実測図



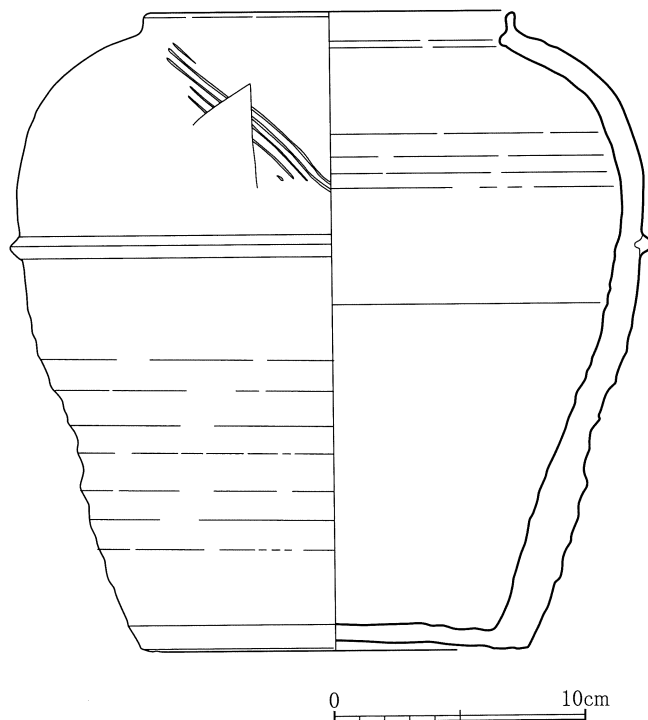


第41図 SE 3 出土遺物実測図

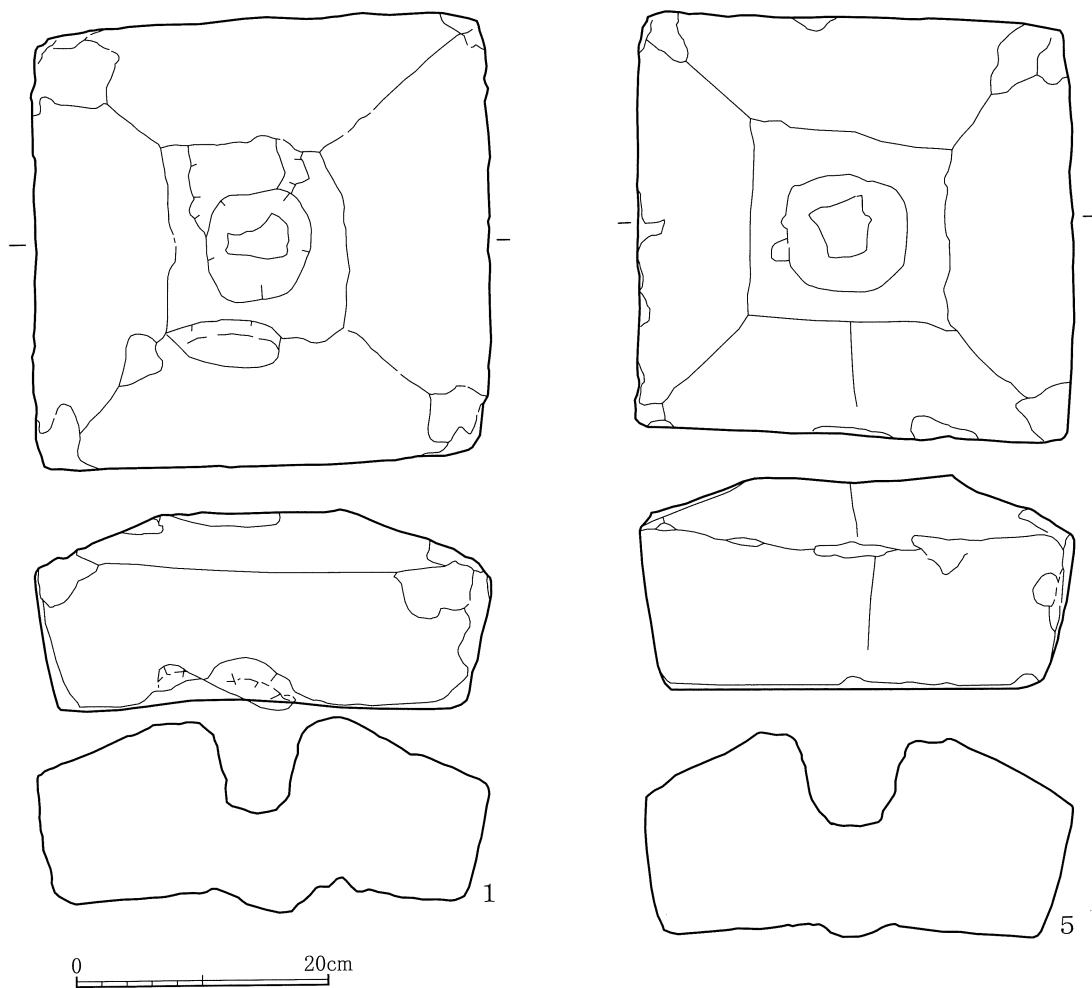


第42図 SE 3 出土遺物実測図

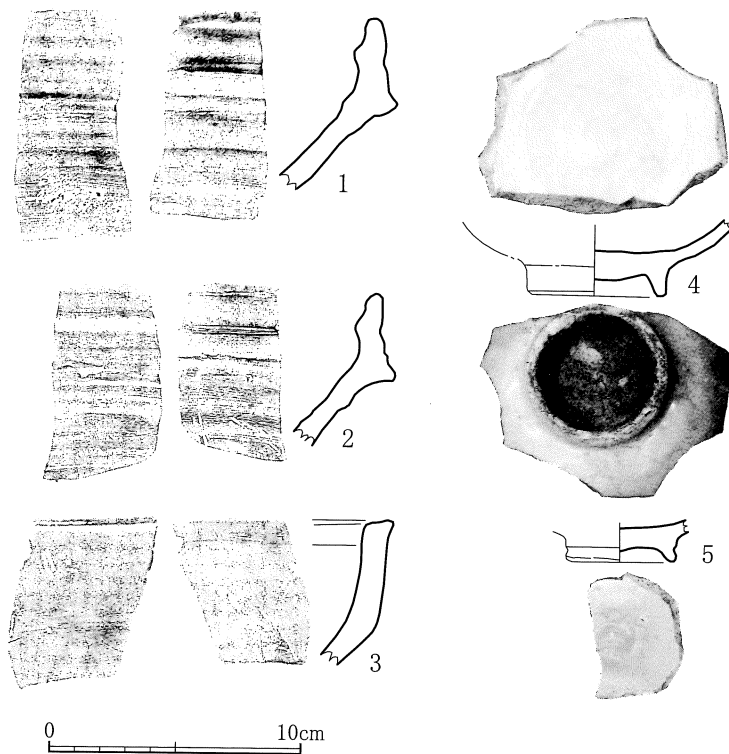
前焼き水差しで、口径14.8cm、最大径25.8cm、底径15.6cm、高さ22.3cm。ただし底部から口縁部まで接合する破片はない。肩部に5条の櫛目があり、胴部に三角突帯1本を廻らせる。灰色を呈する。第45図1・2は備前焼きすり鉢。3は明茶色の素焼き製品で、器面は磨かれている。4は白磁椀で、高台内面は回転へら切りし釉は一部畳付きまでかかる。16世紀の朝鮮製か。高台径5.6cm。5は高台径4.5cmの青磁で、見込みには刻印で花卉で囲まれた中心に「宝」字がある。高台外面は段をもつ。釉は高台内面下端にも3mmほどかかる。高台内面は回転へら切りである。14世紀後半頃のもの。第44図1は火輪で下面の中央部が突き出ている。一辺36.3cm×35.5cm、高さ16.0cm。5は火輪で、これも同じく突き



第43図 SE 3 出土遺物実測図

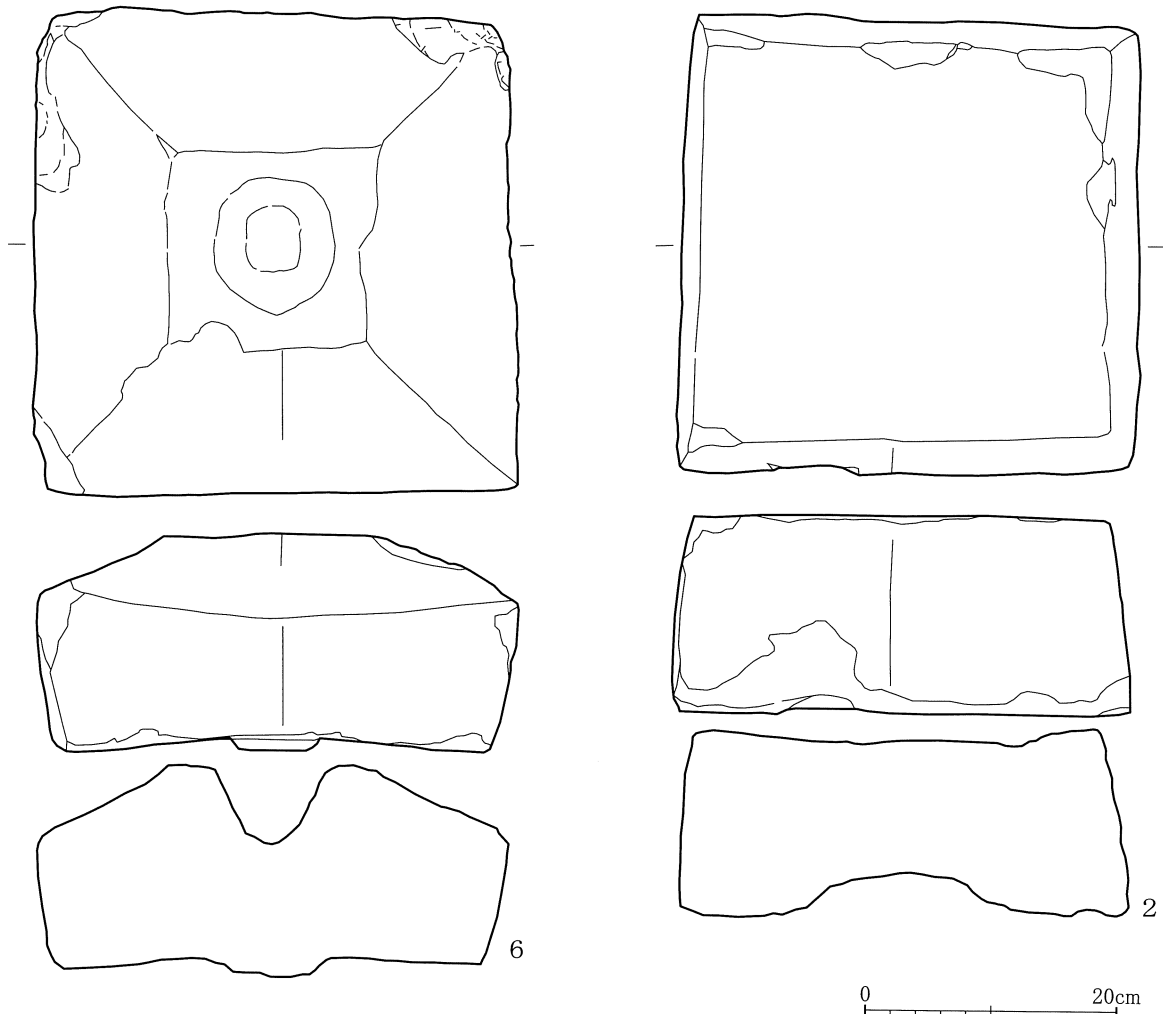


第44図 SE 3 出土遺物実測図



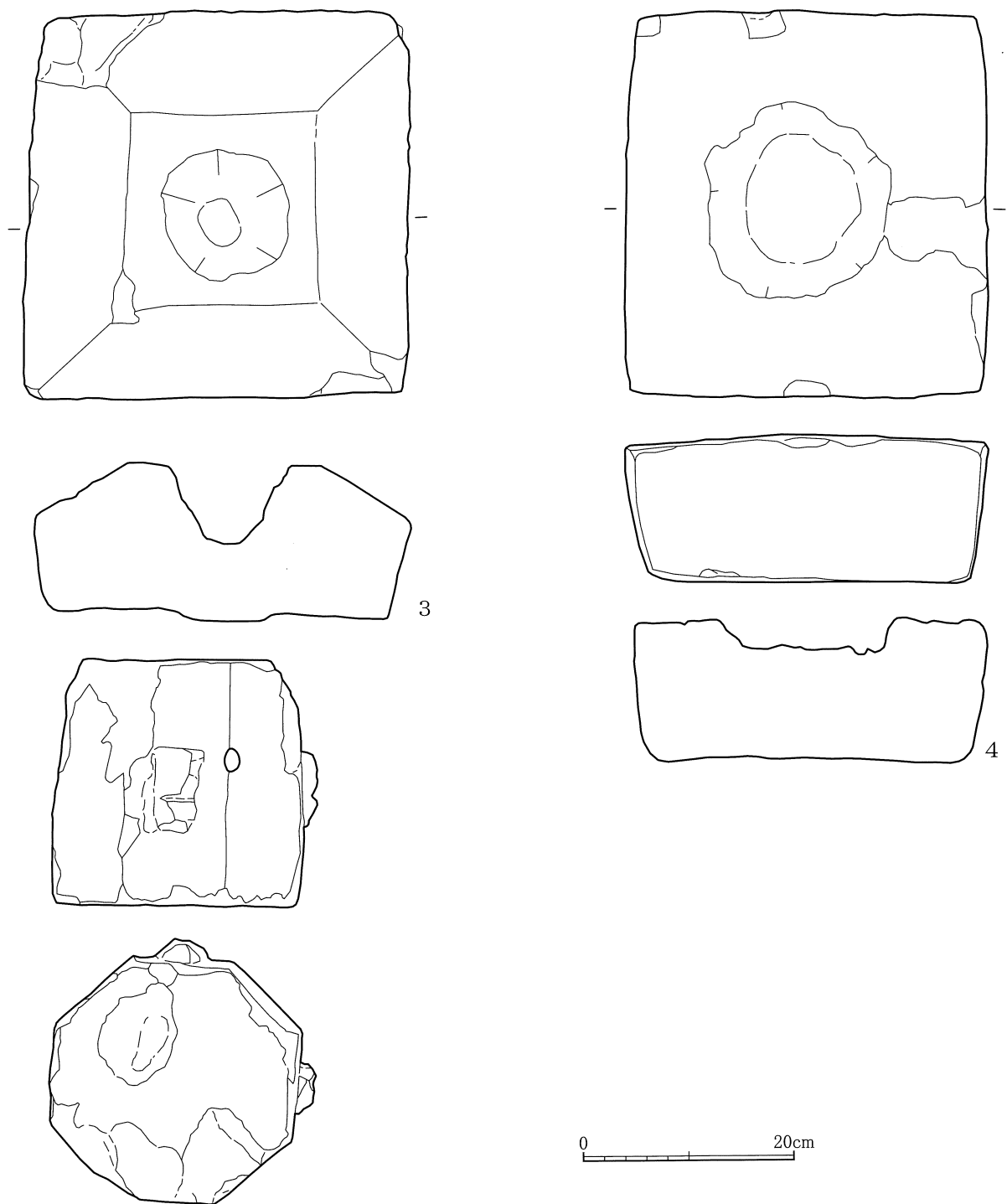
第45図 SE 3 出土遺物実測図

出ている。屋根部上面のひとつとそれに接する側面に刻線がある。一辺34.8cm×33.3cm、高さ16.8cm。第46図2・6は踏み場に並んでいたものである。2は五輪塔の火輪で下面中央は円形に削り残されている。5と同様に屋根部上面のひとつとそれに接する側面に刻線がある。一辺38.6cm×38.7cm、高さ17.3cm。6は火輪で一辺345cm×364cm、高さ15.1cmである。刻線はない。第47図3は火輪で一辺371cm×364cm、高さ13.9cmである。4は五輪塔の地輪である。上面中央部は径18cm前後の円形に削り込まれている。一辺345cm×364cm、高さ13.9cmである。第47図左下は凝灰岩製である。上下



第46図 SE 3 出土遺物実測図

が平たく、側面は八面体をなす。その内の4面に花瓶を浮き彫りしている。ただし、2像は浅く簡略な造形である。側面の表面は焼けて欠け落ちた部分が多い。底面は焼けておらず、立った状態で火災に遭遇したことが分かる。上部に屋根をもち、下部に長い脚をもつ無縫塔か。高さ23.4cm、浮き出た部分を入れた最大幅25.2cm、八角形部分23.5cmである。無縫塔は本来は禅宗寺院の住職の墓塔であるが、次第に在家の人々の墓塔にもなった。

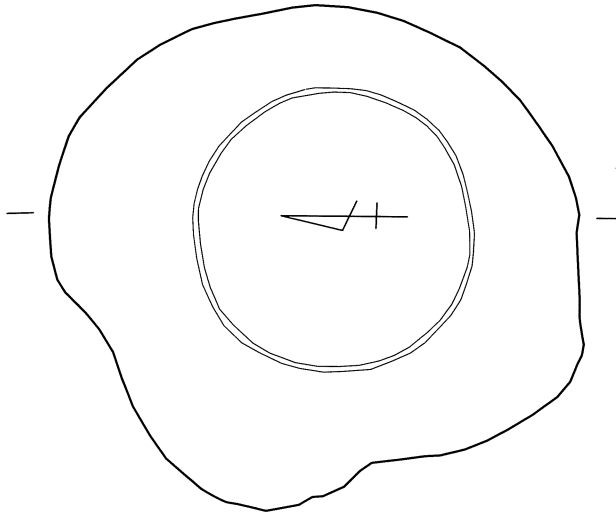


第47図 SE 3 出土遺物実測図



#### 4号井戸（SE4）（第49図）

I区の南端に位置する。多量の瓦礫が投げ込まれていた。湧水のため完掘していない。堀方は直径2.8m程度の垂直の穴で、井戸本体は瓦質の焼き物である。6段まで確認した。繋ぎ目の外側はコンクリートで覆われていた。



井戸桶（第49図）は瓦質と素焼きとの中間のような焼成で、黒褐色を呈する。口径は79.0cm、底径は74.8cm、高さは41.4cmである。製作にあたり桶は三段階（図の三角印の位置で分かれる）に積み重ねられている。先ず下段を帯状に刷毛具を使い整形し、順次上の帯を積み重ねて最初の工程を経て製作されている。器面調整のための刷毛具は幅7cm前後の大型品である。最終仕上げはなで調整だが、外面はほとんど刷毛目が消えるまでに丁寧な作業を行っている。

#### 出土遺物（第50図）

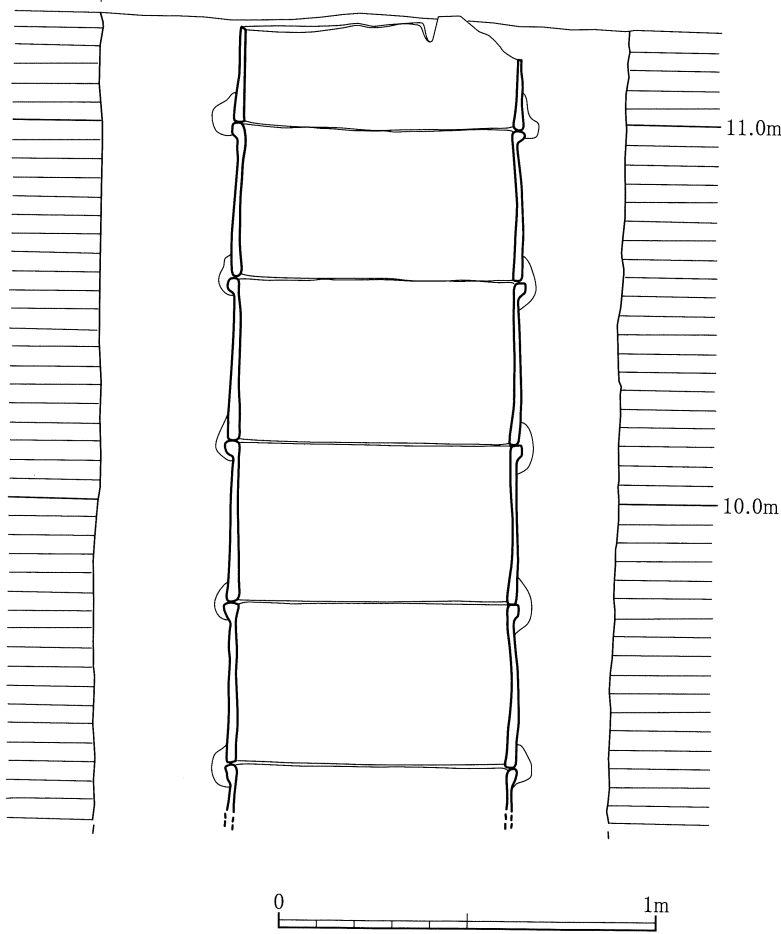
貝杓子である。把手に結びつけるために、2個小さい穴をあけている。貝種はイタヤガイである。この他、銅判転写の茶碗も出土した。したがって、貝杓子の時期は明治時代であろう。

#### その他の柱穴出土の遺物

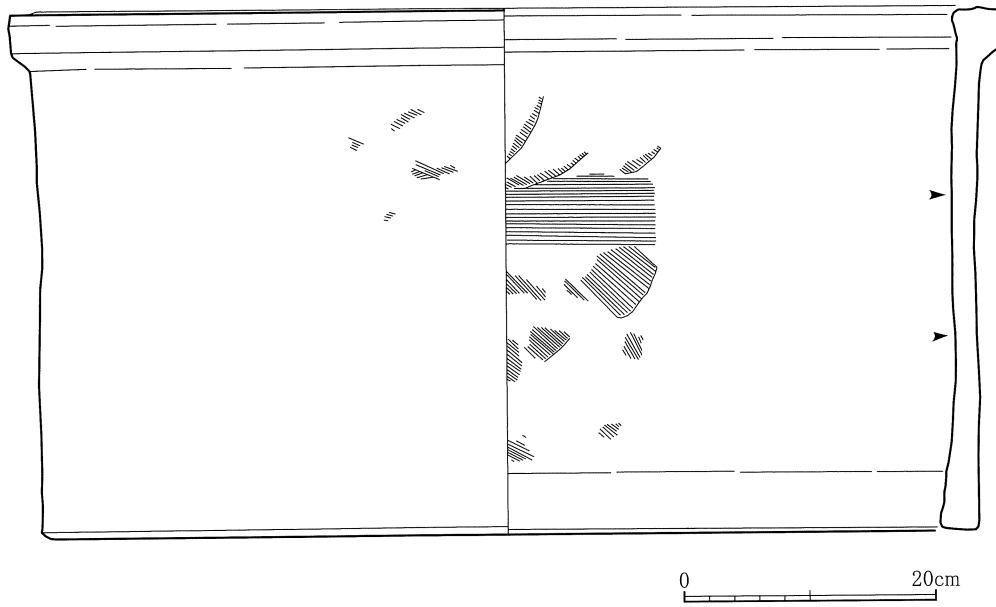
P34出土遺物（第51図1～4） I区の中中部、SK4の北東にある柱穴（P34）から古代の土器が出土した。

P73出土遺物（第51図5） 青く錆びた銅製の容器片である。変形したのか歪んでいる。口縁部が厚く3mm、他の箇所は1.5mmを測る。

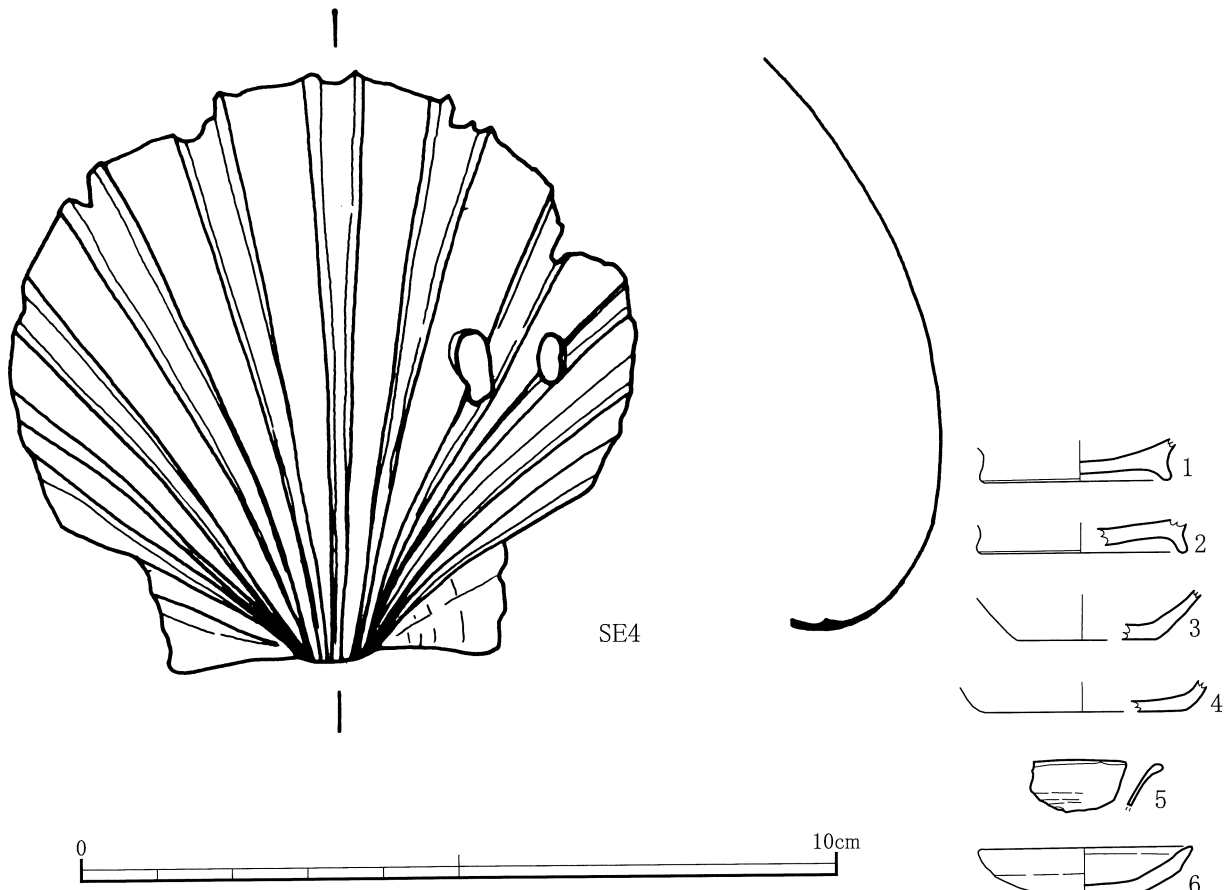
P82出土遺物（第51図6） 16世紀末頃の京都系土師器の皿である。内面と外面上部はなで調整し、薄い褐色を呈する。口縁の片側半周に煤が付着し、灯明皿として使われたことがわかる。径8.5cm、高さ1.9cm。



第48図 SE4実測図



第49図 SE 4 の井戸桶実測図



第50図 SE 4 出土遺物実測図

第51図  
柱穴出土遺物実測図

## 第V章 まとめ

調査の成果を時期毎に要約し、まとめとしたい。

**縄文時代 晩期** (約2,800年前)の土器が少数出土した。周辺には久保田遺跡と同じく、横尾遺跡や一方平IV遺跡等の低丘陵末端や河川沿いの低地にこの時期の遺跡が分布している。このような傾向は大分平野全体に共通し、荏隈杉下遺跡・植田市遺跡・二反田遺跡・牧六分遺跡他が知られ、低地部でのなんらかの生業活動が活発化したらしい。

**古 代** 古代の遺物が調査区内の北部 (I区) と南部 (IV区) で少量出土した。特にI区では土坑1基 (SK3)、柱穴 (P34) がこの時期の遺構である。第34図4は奈良時代から平安時代初めの時期 (8世紀後半～9世紀前半) に、北九州市を中心に、主に瀬戸内海西部周辺地域の福岡から大分、愛媛・山口に分布する「企救型甕」である (佐藤2001)。鶴崎丘陵東部地区では、なぜかこの時期に遺跡が急増したことが発掘調査によって明らかになりつつある。

**中 世** 8棟検出した掘立柱建物跡は中世に所属するとみているが、I区には分布していない。I区で中世のものは井戸1基 (SE3) だけである。地形的にもI区とII区との間は丘陵が途絶え、青灰色の粘土層が入り込んでいるので、土地の利用方法が異なっていたのであろう。

一般に中世の瓦質土器は刻印が多用される。3号井戸出土の雷紋と渦紋の火鉢は、今のところ大分市内と臼杵市内の遺跡からしか出土せず、地域限定的な製品である。3号井戸は焼けた河原石により埋められていたが、火事場のゴミを処理した結果であろう。同時に出土した茶道具の風炉や備前焼き水差しは焼けた建物の中にあったものとみられる。当時このような茶器を所有できたのは富裕な商人あるいは上級の武士であろう。鎌倉時代以来、毛井地区は地頭職の平林氏が領有してきたが、中世の遺物の大半は室町時代末期の16世紀代のもので、遡るものは第32図4・第44図5の2点である。掘立柱建物跡群の方位が揃っていること、全て南北約50mの同一場所に集中すること、上記の特殊な遺物の存在等から考えて、久保田遺跡は平林一族の屋敷跡である可能性が高い。調査区が細長いため全体の様子は分からないが、田原氏や一万田氏の館に見られる約100m四方の屋敷地ではなからう。久保田遺跡の屋敷規模が50m四方程度であれば、「有力在地領主等」の館 (小柳1994・小野2001) とみて矛盾はない。

**近世以降** 1号土坑出土の瀬戸産水鉢は近世瀬戸村の窯業生産編年によれば、紋様・口縁部形状や高台の位置が比較的外側にあること等により、19世紀第2四半期であろう (『瀬戸市史・陶磁史篇』瀬戸市1998)。久保田遺跡からは江戸時代以降の遺物が少量出土した。江戸初期のものと末期のものはあるが、中間がない。これに明治以降の現在に至る遺物が未報告分を含め少量ある。牛乳瓶が出土した。牛乳の容器や蓋はほぼ、ブリキ缶 (明治初期) → ガラス瓶導入 (明治22、3年頃) → 機械栓 (明治33年以降) → 王冠 (大正以降) → 紙栓径3.41cm化 (昭和9年) と移行したという (汐留地区遺跡調査会1996)。久保田遺跡のは大正から昭和初期のものであろう。

### 〈引用文献〉

- 佐藤浩司2001 「豊前企救型甕考」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会論集  
小柳和宏1994 「鎮西における居館の出現と展開―豊後大友氏一族を中心として―」『城と館を掘る・読む―古代から中世へ―』山川出版  
小野貴史2001 「屋敷の規模からみた大友氏家臣団の階級」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会論集  
汐留地区遺跡調査会1996 「汐留遺跡」汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	くぼたいせき							
書名	久保田遺跡							
副書名	県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	大分県文化財調査報告第146輯							
編著者名	高橋 信武							
編集機関	大分県教育委員会 文化課							
所在地	〒870 大分市府内町3丁目10番1号 Tel 097-536-1111(5501)							
発行年月日	2002(平成14)年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くぼたいせき 久保田遺跡	おおいたけんおおいたし 大分県大分市  おおあざけい 大字毛井  あざくぼた 字久保田	332		33° 11' 23"	131° 40' 30"	20000822 ～ 20001031	2,000m <sup>2</sup>	県道鶴崎 大南線 道路改良工事

所収遺跡名	種	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久保田遺跡	包含層	縄文時代晩期		土器	
		古 代		土師器	
	集 落	室町時代	掘立柱建物跡 井戸 土坑 溝	風炉(茶器)	
		近世～	井戸 土坑		

---

久保田遺跡

— 県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

大分県文化財調査報告書第146輯

平成14（2002）年3月29日

編集 大分県教育委員会文化課

発行 大分県教育委員会

〒870-0021

大分市府内町3丁目10番1号

TEL（097）536-1111

印刷 有限会社 元屋印刷

---